

一少年の大連記憶

執筆：秦 源治

(大連常盤小、大連二中、南満工専卒)

編集：甲賀 真広、大野 絢也

凡例

- ・本回想記は、大野絢也、尹国花、菅野智博「一位日本少年の大連記憶——秦源治先生訪問記録」(『口述歴史』第14期、2016年)として台湾で発表された内容が基になっている。本稿は秦源治氏のご意向により、日本語版を本号へ掲載することとなった。なお、原稿は2017年夏に原稿をいただいたものである。
- ・本回想記の翻訳は秦源治氏が依頼した第三者によって行われ、秦氏が内容の加筆修正を行った。
- ・秦源治氏の執筆意図を尊重し、文中の表記や表現は原文のまま掲載している。

本文



昭和3年七五三祝い 母・源治・茂治・一郎

私は、大正 15 年（1926）12 月に、大連で生まれました。父助市は大連で洋服商を営んでおりました。昭和 8 年（1933）に大連常盤小学校、昭和 14 年（1939）に大連第二中学校に入学し、中学時代は“愛鳩部”に所属していました。昭和 19 年（1944）南満洲工業専門学校鉦山工学部に進学し、昭和 20 年（1945）4 月から弓長嶺鉦山で勤労働員に従事しました。同年 8 月、徴兵検査前に第二国民兵の召集令状を受け、動員先から帰連したのが 8 月 15 日午後 3 時過ぎで、その直前の正午には戦争は敗戦に終わったことが分かりその、自宅待機、私は戦地に征かずに済みました。昭和 21 年（1946）3 月南満工専は繰上げ卒業となり、昭和 22 年（1947）3 月 29 日には遂に大連最後の日を迎え“さらば大連！”引揚船「高砂丸」に乗船して大連港を出港、4 月 3 日佐世保港に上陸し、故国への第一歩を印しました。

その後、三重県鈴鹿市神戸町に居住地を構えました。昭和 23 年（1948）1 月に地元の百五銀行に就職、同 61 年（1986）12 月に定年を迎えて退職した後も、二～三の職場で第二の人生を過ごし、平成 8 年（1996）11 月以後は、完全に年金生活者となりました。その一方で、大連関係の絵はがき・資料を収集し、満洲からの帰国者の組織である「20 世紀大連会議」の活動にも携わっていました。



大連市大山通り 丁子屋洋服店開業



大山通り界限

(たうんまっぷ大連から抜粋)

平成 28 年 (2016) 12 月に卒寿 (九十歳) を迎えましたが、日常は至って健康で自由気儘に過ごしております。

一、両親の渡鮮と大連で独立開店

明治 38 年 (1905) 日露戦争終結直後に、三重県津市で屋号「丁子屋」の洋服店を営んでいた店主・小林源六は、丁稚小僧として私の父・秦助市と同僚・建部永吉の二人を従えて朝鮮京城へ進出し、同じ屋号で営業を始めて、二人には洋服店経営法を体験させ一人前に仕立てあげました。父は独立経営を志し、店主の諒解を得て退店と屋号の暖簾分けを許され、大正 9 年 (1920) 1 月に「丁子屋洋服店」を大連大山通りに開店しました。同僚の建部氏は、京城本店直系の「榎満洲丁子屋」を奉天に設在・経営に当たり、のちに新京に移転して終戦を迎えました。京城本店はのちに「丁子屋百貨店」に発展しました。京城・奉天 (新京)・大連と基盤は異なるが、常にお互いに交流しておりました。

母しげは、作法見習いに津市の小林家に奉公していて、父と大正 4 年 (1915) 2 月に結婚し、直ちに京城に渡りました。子供は 5 人儲け、姉は京城で、男兄弟 4 人は何れも大連で出生しました。

二、連鎖街と丁子屋洋服店

私が生まれた時は、我が家の丁子屋洋服店は、支那大連市大山通り 32 番地でした。昭和 4 年 (1929) 12 月に大連連鎖商

店街が竣工開業し、丁子屋洋服店はその真ん中の銀座通り西側に移転しました。それ以来、戦争が終わり引揚げるまで、ずっとそこで暮らしていました。普段は連鎖街銀座通りと称していましたが、正式の住所地は大連市常盤町 30 番地でした。



市街の寵児、市民を吸引する連鎖商店街



連鎖街銀座通り
丁子屋洋服店移転

新たに建設された近代的商店街は、次の図面に示すように、A～Hの8ブロックに分かれて各業種の商店・事務所約二百戸が連なる状態で、恰も百貨店仕様のようでもあったので、「連鎖商店街または連鎖街」と呼ばれて市民に親しまれました。

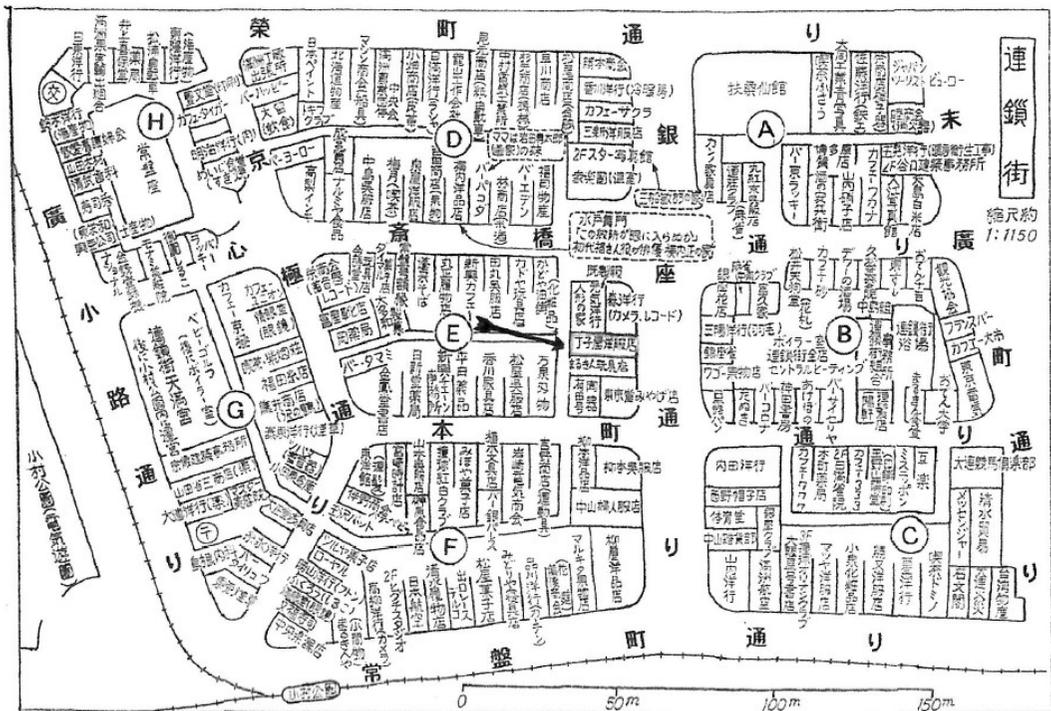
当初は大通りに面した四囲の通りは三階建て、内部の通りは二階建てに統一されていました。そして、南側の電車通りは常盤橋に因んで常盤町通りと呼ばれていましたが、その他の通りは、日本内地の有名繁華街の名称が付けられていました。即ち、東側ダルニー川に面して末広町通り（大阪）、西側電気遊園を挟んで広小路通り（名古屋 or 東京上野）、北側大

通りは栄町通り（名古屋 or 神戸）、中央南北に貫く銀座通り（東京）、西寄りには少し折れて京極通り（京都）、東西に走る二条の北側は心斎橋通り（大阪）、南側は本町通り（大阪）、と夫々が愛称で呼ばれていました。

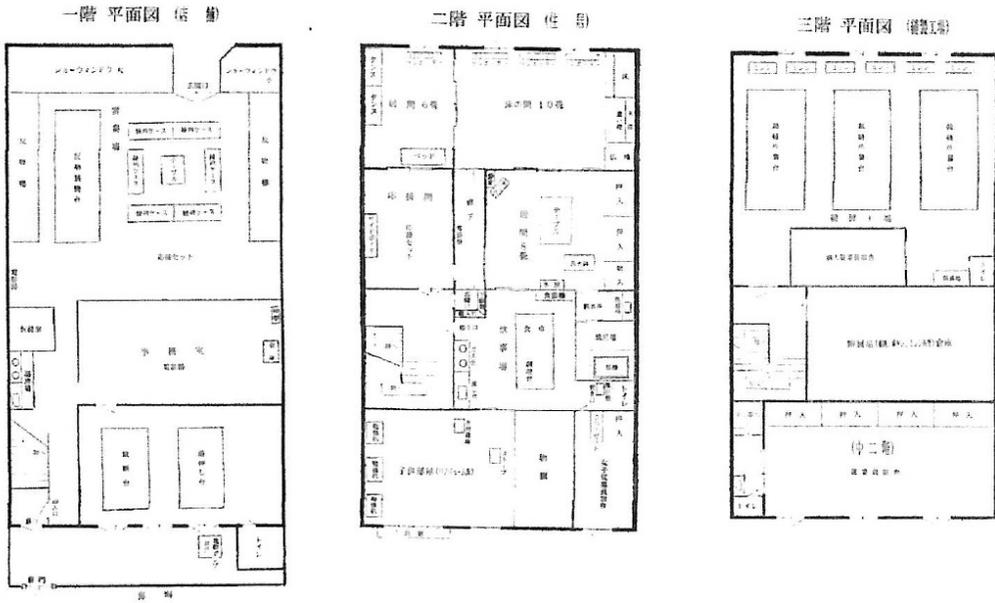


連鎖街銀座通り

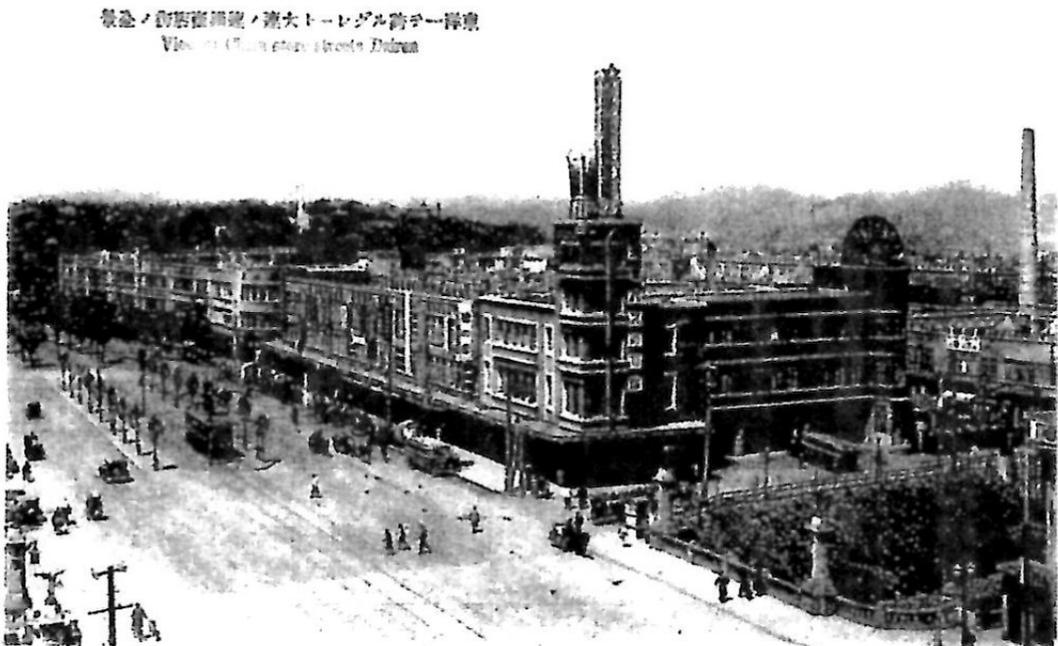
右：森洋行南隣りが丁子屋



たうんまっぷ大連から抜粋（昭和13年～15年頃）



連鎖街における丁子屋の見取り図 (増築後)



東洋一ヲ誇ルグレート大連ノ連鎖商店街ノ全景

連鎖街の建築構造は、その名の通り、区画ごとに途切れることなく、連なった近代的な建物で、ライフラインは電気、ガス、上下水道とも完璧に整い、トイレは全戸水洗で、街中清潔感に溢れていました。最も特徴的と云えるのは、Bブロックの地階に大ボイラー・大煙突があって、街区全体を一括して行なう中央集中暖房装置（セントラル・ヒーティング）が設置されていました。各棟全戸の窓際には、ラジエーターがあり、冬期は毎日明け方にスチームが通って起床時には暖かくなり、夜は十時になると止まる仕組みでした。また、この大ボイラーの湯を利用して、公衆大浴場が設けられ、町中の人々は年間を通じ毎日入浴を楽しむことができました。

大山通りから引越してきた我が家は、一階は店舗、二階表側が家族の住居で、裏側は職人達の仕立作業場でした。

次に掲げる写真は、昭和8年（1934）に京城丁子屋本社、満洲丁子屋の重役一行が来連したときの店舗前での記念撮影、および星ヶ浦海岸での姉兄弟5人です。

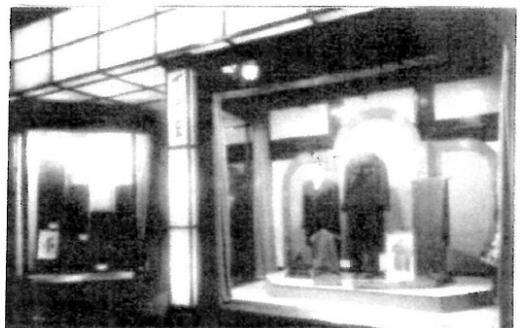
昭和10年（1935）頃になると、二階建て統一の内部通りでも三階建てに増築したり、裏の土地に余裕のある処では高層建築が建ち貸しアパートなどが増えました。我が家も昭和11年（1936）秋に二階建てを三階建てに増改築し、二階は全フロアを住居部とし、三階表側は仕立工場、裏側に裏地・ボタン類の倉庫を設け、また裏側の中二階は男性従業員宿舎となり



京城丁子屋本店・満洲丁子屋の役員一行
来店 昭和8年



星ヶ浦海岸にて姉と兄弟揃い



増築改装後のショーウィンドー



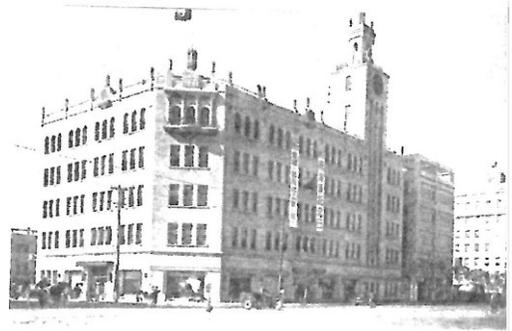
小波町の別荘



大連大山通り三越と郵便局



連鎖街子供神輿 弟と連鎖街天満宮



近代的麗容を誇る三越百貨店の景観

ました。改築工事中の一階店舗内で、夜間に長兄と二人で、ベルリン・オリンピック女子二百メートル平泳決勝で、河西アナの「前畑ガンバレ！前畑ガンバレ！」の絶叫放送を聴きました。

昭和10年（1935）の夏休みは、郊外の小波町の別荘で暮らし、静ヶ浦で海水浴、近所の紫河橋上からの鯊釣り、老虎灘沖での太刀魚漁などに興じ、日々楽しく一夏を過ごしました。この家は、後日父の実弟で、幼児の時に養子に行かれて吉田三治となった叔父に譲られました。大山通り時代から父の店の手伝いをし、その頃は支配人を務めていました。

春・秋の大連神社例季大祭は、大御神輿の渡御に従って、街の子供が担ぐ子供神輿も街中を練り歩き、お祝儀にお菓子やサイダーを貰って大喜びをしました。夏には、天満宮境内で昼間は子供相撲が催されて盛り上がり、夕暮れともなれば個々の商店が店先に思い思いの品を揃えて夜店が並び、金魚掬いやカキ氷と、夕涼みのそぞろ歩きが楽しみでした。お盆の夜が更けると、天満宮境内では盆踊りの輪が幾重にも広がり、賑わいをみせました。天満宮は後にベビーゴルフ場となり、子供ながらボールを追って遊びに興じました。



新三越の屋上にて 弟建四郎と



大連の中心股脈を極む常盤町連鎖商店街
と三越前の景観

昭和12年（1937）6月に新しい大連駅が竣工・開業し、9月には電車通りを隔て、連鎖街と向き合っ三越大連支店が新装開店し、連鎖街は大連駅前と云う地の利を生かして、所謂「駅前商店街」の性格を持つこととなり、浪速町に次ぐ繁華街となりました。大山通り時代の旧三越は、大連中央郵便局と接して日本橋畔近くにありましたが、店内は履物を脱いで上がらねばならず、下足番に番号札と引



現在の旧丁子屋 2015年撮影

替えると云う旧態依然の処がありましたが、新店舗は最新近代的なハイカラ気分が漂い、自ずと足が向く感じでした。

丁子屋と斜め向かいにあった文房具店・内田洋行では、しょっちゅうノート・鉛筆や書道道具などの学習用品を買っていました。南満工専の頃は製図器具など高価なセットも揃えて入手しました。改築するまでは内風呂がなかったので、入浴は大浴場に通いました。冬には湯上がりのタオルを廻しながら帰路につけば、凍って氷棒になるのを面白がっていました。本屋は金鳳堂、大阪屋號書店と二店舗もあって、少年漫画や参考書の購入に

よく利用しました。

現在、大連の旧建物取壊しは急ピッチで進められているようですが、連鎖街は銀座通りの東側部分は撤去済、西側部分は未だ残っていると云うことで、最近訪連された方が、現在の丁子屋跡の写真を撮って来てくださいました。一階部分は隣の森洋行と内部は連続しているようですが、二・三階の外観は昔のまゝのようでした。

三、大連での食生活

戦前の大連では、西洋料理・中華料理・日本料理など、色々な料理が豊富で自由に食べられました。父が家族を連れて、三ヶ月に一度は外出に出掛けました。吉野町の西洋料理店“大連亭”へは馬車に乗って行きました。フランス料理のフルコースです。日本人経営の有名な中華料理店“扶桑仙館”は、町内の目と鼻の先と近く、玄関を入ると係員が銅鑼を叩いて来客を告げます。大きな音に客は一瞬怯みますが、その歓迎ムードに気分は直ぐに和みます。出される料理を次々に平らげていると、終わり近くに出される火鍋子が食べられなくなるので要注意でした。

“扶桑仙館”の他にも電気遊園(のちの小村公園)の西崗子に面した裏門近くに、翠緑の樹々の間にしっかりと鎮まって“登瀛閣”という支那料理店がありました。時の満鉄総裁が大いに支那料理通を發揮し、袁世凱の料理人を連れて来て、満鉄が出資し、此処に料理店を経営させ、



大連連鎖商店街
中華料理店扶桑仙館



大連市伏見台
電気遊園 登瀛閣

建築から調度品まで運営一切を委託していたもので、本格的な北京料理がご自慢でした。子豚の丸焼きなどをそのまゝの形で銀の盆にのせ、主客に披露したのちに切り分けて出すなど、如何にも支那風でありました。二階の窓からは大連湾が一望でき、素晴らしい眺めが楽しめる場所でもありました。

母に連れられて浪速町へ買物に出掛けるときは、何とんでもデパート幾久屋の食堂でお子様ランチを食べるのが目的の一つでした。それと帰途磐城町の浪速鮓に立寄って食べる子供用ちらし寿司も

楽しみでした。

日常の家庭料理は、当然母も手懸けていましたが、主に雇いの中国人料理人が、朝昼晩三食とも、我が一家と住込み従業員の分を賄ってくれていました。

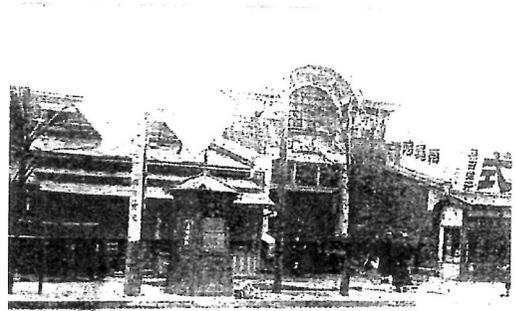
朝食は和食が主で、味噌汁と海苔・漬物が必ず付きました。父の朝食だけは別で、オートミールに牛乳と半熟卵に決まっていました。

昼食は、家にいるときは、斜向かいにある日露パンで買った食パンのトーストかあんパン・ジャムパン・クリームパンかでした。通学用弁当は母が作ってくれましたが、お菜には明太子・焼塩鮭・蒲鉾・コロッケなどがよく入っていました。

夕食はオムレツ・カレー・豚カツ・肉団子（今で云うハンバーグ）や、焼き、煮るの魚類も豊富でした。月一回は必ずすき焼きがあり、家族一同で鍋をつゝき食べました。時には餃子も作ってくれました。その時は皮に具を包むのをよく手伝いました。あちらでは、湯で茹でる水餃子が主で、焼餃子は日本に引揚げの後初めて食しました。その外にも、ユーピン（メリケン粉を水に溶き幾重にも折り込みこねて薄焼きにしたもの）・ガタタン（中華風すいとん）なども美味しくいただきました。何と云っても忘れられないのは、大浴場へ行って湯上がりの帰途、浴場前空地の中国人屋台で、蒸したての肉汁たっぷり、「小籠包」ほどの大きさで一個一銭の「天津包子」を十個買って、道々食べた美味しさです。態々銭湯へ入浴に行った

のも、これがあったからと、懐かしい思い出です。

常盤橋の辺に、古くから信濃町市場がありました。米穀・薪炭・青果・鮮魚・精肉・食料雑貨・日用品の全般に亘る小売市場でした。市内に七ヶ所あったうちで最も古い市場でした。



信濃町市場

この信濃橋市場は、新大連駅の開業に伴う駅前広場の整備のため、移転を余儀なくされ、昭和12年（1937）に羽衣町（新三越の裏手）に鉄筋コンクリート造り三階建ての堂々たる近代設備完備の市場が完成して移転し、以後は大連市場と称するようになりました。

一階の内部は回廊式に通路を挟んで日・華人商店が店を連ねており、食料は何でも揃う市民の台所でした。二階も回廊式に、呉服店・洋服店・洋品店・小間物屋・本屋・文具店・玩具店・和洋菓子屋等凡ゆる業種の店舗が並び、恰もデパートのようで、三階はホール等の文化施設や事務所関係の入居があり、静かな雰囲気でした。



駅前広場として整備された
信濃町市場跡地の全貌



商業界に異彩を放つ大連市場の壮観



文化施設の完備せる大連市場の偉観

米・味噌・醤油などは専門のお店に注文すれば、直ぐに配達してもらえますが、日頃の野菜・魚肉類の買出しは、母が取り仕切っており、毎日が市場通いでした。いつも種別毎に決まった商店での買物でした。肉類と野菜は中国人の店でしたが、日本語が通じ言語の不便は全く感じられませんでした。

お菓子類も沢山ありました。毎日のお八つは用意されていて、欠かさず与えられました。何もないときは五銭か十銭貰って、お菓子屋さんで森永や明治のキャラメルを買って食べました。時にはチョコレートを買ったこともありました。到来物の羊羹やカステラも、ドーナツやケーキも、よく口にしました。しかしそれも戦況悪化前の話であり、徐々に食物は窮屈になってきました。

落花生、ピーナツと呼び名は変われど、思い出深いのは赤い皮付き南京豆。中学校帰りの道すがら小村公園前で、リヤカーに積んで売っていて、とても廉価で一銭でも結構な量があり、空腹を満たすに格好のものでした。いつも買って食べていました。

一寸贅沢と云えば、“甘栗太郎”の天津甘栗です。店頭で大きな鉄鍋に細石と一緒に生栗を煎っていて、その煎りたてを浪速町本店と常盤橋天満屋ホテル一階で売っていました。

日本から大連に来た人が帰るとき、手土産として沢山の物を持ち帰りました。時計・カメラ・煙草・砂糖・ザラメ等々で

す。大連は免税港なので、これらの商品は関税がかゝらず、少々廉価だったので。この他、良く歓迎された土産品は春雨でした。支那素麺とも呼ばれていて、大変喜ばれました。

四、学生時代

(1) 大連常盤小学校

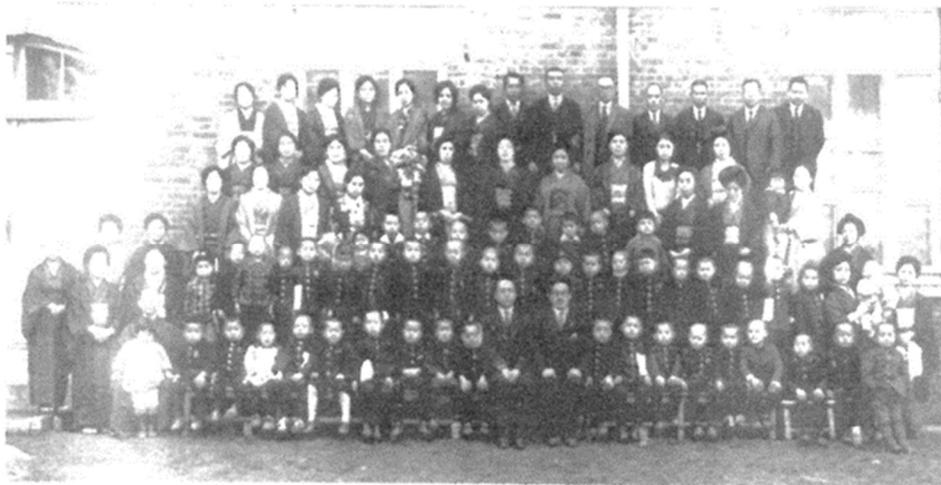
昭和8年(1933)4月4日、学齢に達して、最寄りの大連常盤小学校に27回生として入学しました。元は、明治44年(1911)3月に開校した大連第三尋常高等小学校という大連では三番目に古い学校ですが、常盤橋近くということで、大正13年(1924)4月1日に大連常盤尋常小学校と改称されました。所在地は西公園町8番地でした。



大連常盤尋常小学校
南東角よりの眺望



大連常盤尋常小学校校章



昭和八年四月四日 入学記念
校長 齋藤參藏先生
二級教授 土川卓郎先生

大連常盤小学校入学記念写真

昭和8年4月4日



常盤小学校六年二組



土川・久保両先生
昭和 38 年



土川・久保両先生
昭和 43 年

各学年は、1 クラス約 50 人の男(青組・黄組)女(赤組・桃組)四クラスで 200 人程です。私は二組(黄組)ですが、入学 52

名、転入 23 名、転出 26 名、卒業 49 名でした。6 年間通年の者は 32 名ですが、転入生を含めクラスメートは 75 名です。平成 29 年(2017)4 月現在、連絡のとれるクラスメート生存者は僅かに 7 名のみとなり、淋しい限りです。

我ら 27 回生二組の担任教師は、一年入学から三年まで土川卓郎先生、四年から六年卒業まで久保勘一先生でした。両恩師の学習指導により小学課程の学業を修め、同時に将来の人生基盤となる薫陶を受けて、今に至っていることを沁々と思いき知らされて、感謝の一言に尽きます。

茲に両恩師のご略歴を記しておきます。

土川卓郎先生

明治 40 年(1907)8 月 1 日岐阜県揖斐郡池田町で出生 昭和 3 年(1928)3 月岐阜師範卒 昭和 4 年(1928)3 月旅順師範学堂研究科卒業後、兵役を経て同年 9 月大連朝日小学校に奉職 昭和 7 年(1932)4 月常盤小学校に転任 昭和 8 年(1933)4 月～11(1936)年 3 月の 3 年間は我ら二組を担当 次いで昭和 15 年(1940)3 月まで中国人小学校に当たる土佐町公学堂で奉職し、以後北京へ留学して中国語の習得を深めて復職し、終戦まで約六百人の教え子を育成しました。

戦後昭和 22 年(1947)4 月岐阜県公立学校教諭となり、揖斐郡小・中学校長を歴任 昭和 42 年(1967)3 月退職 引続き昭和 49 年(1974)9 月まで不破郡赤坂

町教育長、揖斐郡池田町教育委員を務む
昭和 57 年（1982）6 月、来日した土佐町
公学堂時代の教え子と対面の新聞記事が
報道される。その後もこれらの教え子と
の交流のために中国語の修練を続けてい
たと、ご自身で仰言ってみえました。平
成 17 年（2005）7 月 3 日逝去 97 歳 土
川先生は、教育畑一筋に撤し、大連時代
の中国人を含む多くの子弟を熱心に育て
られた真の教育者と云えます。

久保勤一先生

明治 43 年（1910）10 月長崎県五島で出
生 昭和 5 年（1930）3 月長崎師範卒 昭
和 10 年（1935）4 月大連常盤小学校に赴
任 昭和 11 年（1936）4 月～14 年（1939）
3 月の 3 年間は我ら 27 回生二組を担任
次に女子組を 1 学期間のみ担任し、同年
7 月末に教職を辞し、市内沙河口でゴム
工場の経営を始む 戦後長崎県に引揚げ、
漁協組合長・県漁協連合会長を経て県会
議員・県会議長から、昭和 37 年（1962）
参議院長崎地方区で初当選、農林政務次
官・文教常任委員長を歴任して国政の一
翼を担い、二期目途中の昭和 45 年（1970）
2 月に転進して長崎県知事に当選し、連
続三期を務む 平成 5 年（1993）11 月 23
日逝去 83 歳 久保先生は、独立不羈、
政治界に転身して自ら雄飛を果たした実
行力の持ち主、戦後困難の時期を生き抜
くための情熱を身近に示してくださいま
した。

昭和 35 年（1960）頃には、漸く世の中

も落ち着きが戻りつゝあり、各学校の同
窓会なども行われ始めました。我々二組
は土川先生を迎えてミニクラス会を行な
うようになりました。その頃に久保先生
が参議院議員当選で初めて消息が知れた
ので、両先生を一堂に囲む会を企画し、
昭和 38 年（1963）8 月に「雲仙ホテル」
で、昭和 43 年（1968）8 月には岐阜県笠
松町「四季の里」で、と二回の機会を設け
ました。

五年生に進級して大連少年団に入団、
常盤隊に所属で、隊長は久保先生が務め
られました。ネッカチーフは常盤小スク
ールカラーの「濃いグリーン色」でした。



大連少年団常盤隊（ボーイ・スカウト）



団章

綱領：

- 一、忠孝を重んじ義勇奉公の誠を致す
- 二、正義を尊び博愛精神の実を挙ぐ
- 三、身心を練り質実剛健の気を養う

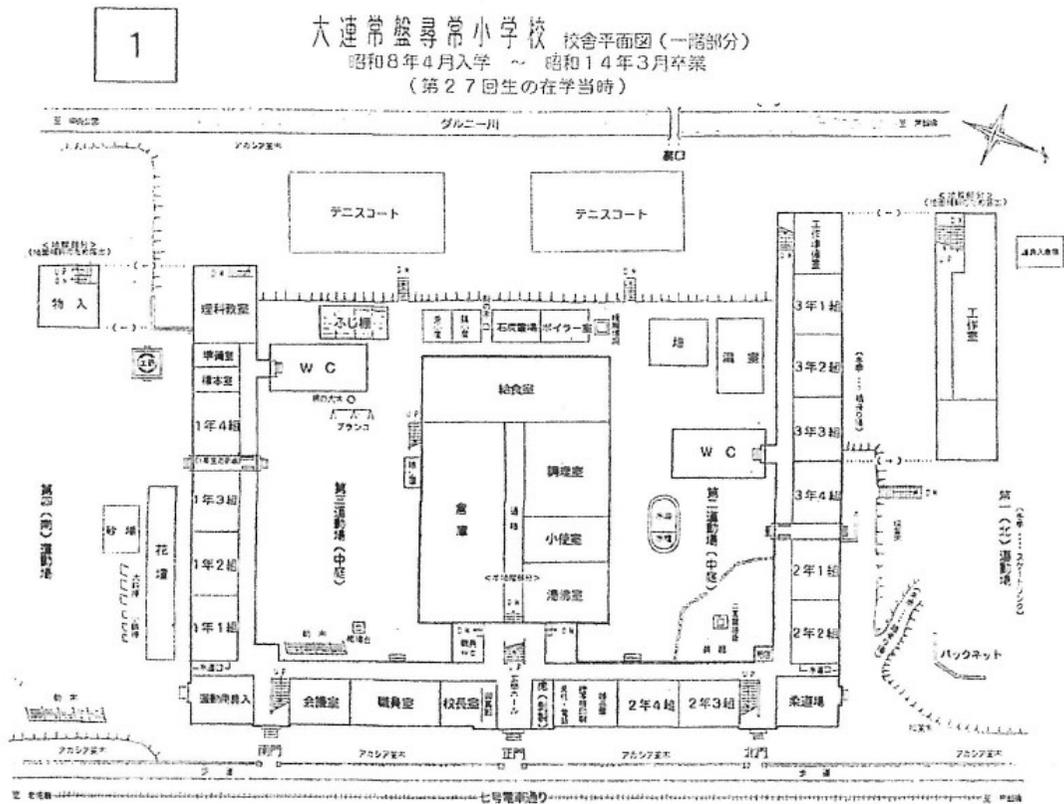
この三綱領を具体化し、敬礼は三本指を揃えて行ないました。「そなえよつねに」をモットーに団体訓練を通じて心身を鍛え、社会に奉仕する青少年運動の一環でした。森林や海浜でのキャンプは自立克己協力の精神が鍛えられ、街頭での交通

整理など社会ルール観念の習得に大いに役立っています。

校舎の写真は多くの方から古いスナップや母校再訪の折りの現況がいろいろと披露されておりますが、校舎内部はどうなっていたのだろうか、記憶のあるうちに当時の面影を記録しておくことが必要だろうと考え、平面図を作成しました。建物は一部地階付きの総二階建てでした。二階の北側一番奥の最も寒い部屋が男子六年男子一組と二組の教室に当てられていました。女子六年三組と四組および五年三組・四組は暖かい二階の南側にありました。「男女七歳にして席を同じゅうせず」の規範が歴然としておりました。それなのに、男子六年の教室の手前には保健室があり、応急手当てや昼休みに肝油を飲みに女子生徒が保健室に来るのは当たり前で、来た序でに男子生徒の教室が覗かれていました。また、土俵は南運動場に設けられていましたが、男子生徒が体操時間に禪しを締めた裸身で相撲をとる様子を、二階の窓から女子生徒が面白がって覗いていました。

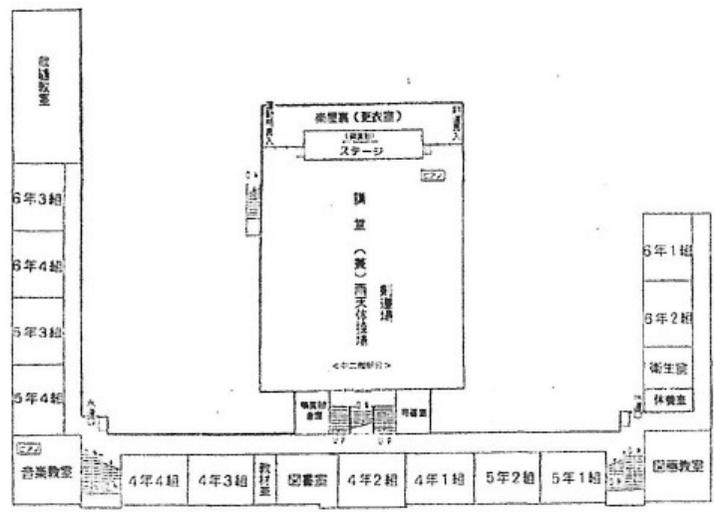


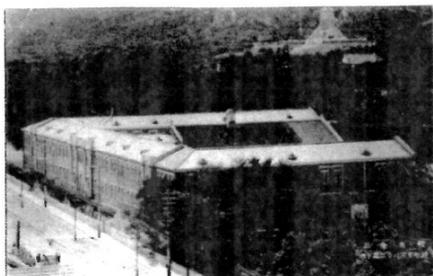
大連常盤小学校全景



2

大連常盤尋常小学校 校舎平面図（二階部分）



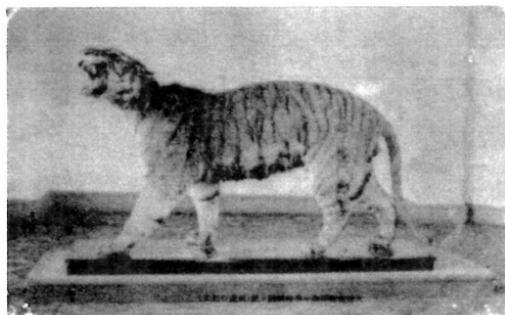


校舎全景

今でも私は小学校の校歌は歌えます。同窓会の際には皆で一緒に歌いました。歌詞の冒頭は「まぢかに仰ぐ忠霊塔をよしまことおもいつよ」です。学校の近くに忠霊塔がありました。また、学校のテニスコートの裏側にダルニー川と云う小川が流れて常盤橋の下を通っていました。新しい校歌は、昭和12年(1937)4月に制定されました。古くから明治41年(1908)5月制定の大連小学校共通の校歌がありましたが歌った記憶はありません。それまでは「ダルニーの水我庭の……」と云う歌を校歌と思っていましたが、これはダルニー行進曲と云う別の歌で、運動会などで歌うものでした。



大連西公園の猛虎

大連常盤尋常小学校所蔵
剥製の虎(丙寅紀念)

常盤小学校の正面玄関を入ると、右手に大きなガラスケースに収まったシベリア虎の巨大な剥製が置かれていました。学校のお守りと云われ、常盤小の名物でもありました。その猛々しい姿は、常盤小出身者には齊しく強烈な印象を残しています。虎視眈々と辺りを睥睨する容姿は弩迫力に満ち、新入りの一年生は怖じ気づき、在校生も急ぎ足で通り過ぎていました。外来者も度肝を抜かれたと云う評判でした。

ロシア統治時代に、この虎は時の奉天総督から極東太守アレキセイエフへ献上され、戦後も明治44年(1911)秋まで西公園で飼育されていました。虎の死後は剥製にして常盤小にて保存されていましたが、どうして常盤小の玄関番になったのかは詳らかではありません。

日露戦争当時、一人の日本人婦人が機密書類を盗んだ女スパイとして捕らえられ、虎の檻に放り込まれて咬殺されたとの風説が流され、公園の虎の檻の立て札

にもそのことが記されていました。明治の戦時画報には、絵入りでその事件が報道されていました。

西公園は、初め市の西端にあったので、そう呼ばれていましたが、古くは虎の檻があり、巨大なシベリア虎が飼育されていたので虎公園とも称せられていました。市街地が次第に西に発展するに連れてほゞ市の中央に位置する格好となり、昭和3年(1928)に、中央公園に改称されました。

余談になりますが、常盤小の所在地は西公園町ですが、改称されても町名はそのまま変わらず、満鉄本社近辺の東公園町も東公園が消滅した後もそのままでした。



大連虎公園



風致に富む冬の大連中央公園

平成12年(2000)8月に、『われらが母校名はこれ常盤～二七回生の軌跡～』を自作で80部作成し、当時ご存命でした土川先生をはじめ、同期二七回生男女の生存者は無償配布しました。これは、終戦のどさくさに、また動員先から直接引揚げ復員したために、思い出の写真すら失ったものを共有して、同じく郷愁を分かちあえたら・・・との思いに駆られ、男女クラスメートに呼び掛けて集めた資料の複製写真集です。内容は次の通りで、A4版、カラーコピー、116ページでした。



われらが母校名はこれ常盤
～二七回生の軌跡～ 表紙

第一章 母校『大連常盤小学校』のプロフィール(沿革・歴代校長・校章・校旗・校歌・校舎等)

第二章 われら二七回生 入学から卒業まで(各クラスの入学式・一年から五年までの修了と六年卒業記念写真等)

第三章 忘れ得ぬ恩師たち(思い出の

写真・文集等)

第四章 大連常盤会および同窓会 (スナップ写真等)

付録 (1) 『卒業記念写真帖』 (複製)

付録 (2) 常盤小二七回生名簿 (組別)

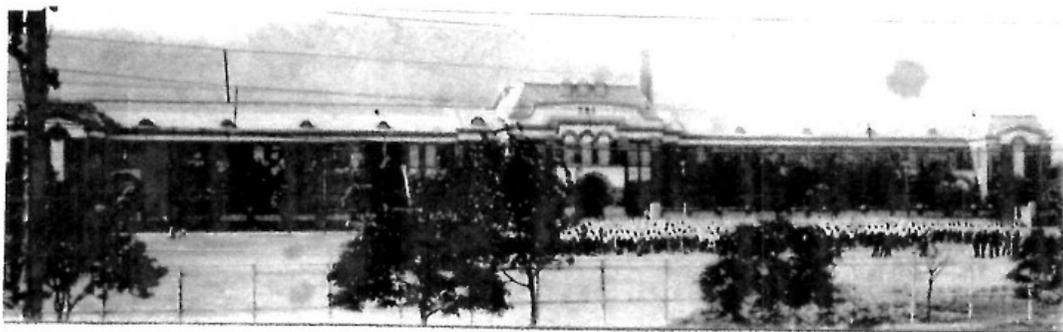
受取られた皆様方からは、心底喜んでくださり、土川先生からは次の歌をいただきました。

「ふるさとは遠い異国の街となり 思い出かなし あゝ吾がときわ」

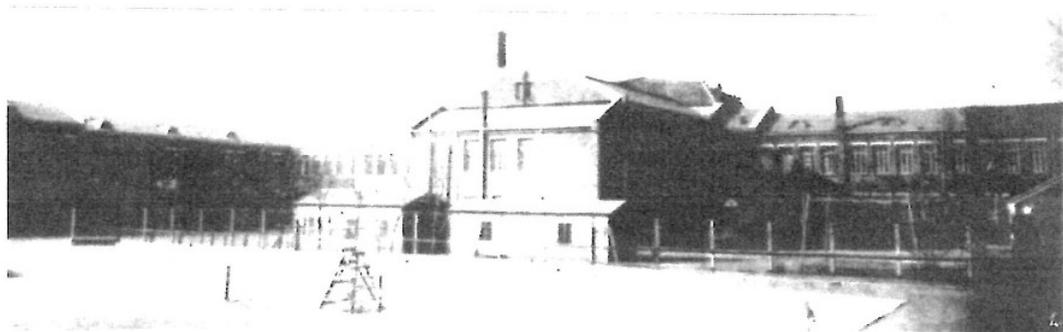
(2) 大連第二中学校

当時の大連には男子中等学校は、官立

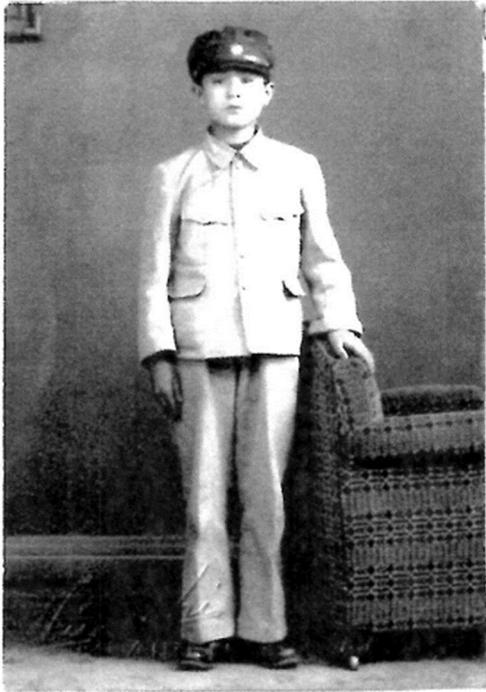
大連一中・大連二中・大連三中・市立大連中学の普通校 4 校と、私立大連商業・市立大連実業・官立大連工業の 3 校がありました。普通校 4 校の入学試験は同時に共通で合格者を、住所近くの学校を主に成績順に配列して学力が概ね均等になるように配慮されていました。ただし、兄が就学および卒業の者は、兄と同一の学校に入学することを許されていました。女子の高等女学校 7 校も同様の仕組みでした。各学校とも殆ど同一ですが、各学年は概ね 50 人の組が 5 組あって、1 学級で約 250 人、全校生徒は 5 学級総計で、1,250 人程でした。



大連二中校舎正面全景



大連二中校舎背面全景



大連二中入学記念

私は兄が二中在学中でしたので、昭和14年（1939）4月に大連二中に入学しました。

二中の校歌は、大連一中とほぼ同じで、第二節の歌詞の三行目が、一中の「大連市なる中学校」とあるのが、二中では「大連市なる我が二中」という違いだけでした。二中の初代丸山校長は一中の副校長から赴任して、兄弟校なので校歌は同一でよい、とのお考えだったようです。勿論校章・校旗・綱領などは異なり独自のものでした。

入学すると、先ず「五綱領」「実行七則」を徹底的に叩き込まれました。特に実行七則の「一、外国人ニ対シ公正ナル態度ヲ持ツコト」は強く仕込まれました。昭

和16年（1941）には「四、指導者トシテ他民族ヨリ信頼ヲ受クルニ足ル品位ト実力ヲ養フコト」に改められました。これがこの学校の校風でした。

一組に金州から汽車通学する郭と云う中国人生徒がいました。彼ははずば抜けて優秀で、勉強は通学の往復車中で予習復習をするだけだったそうです。一年から四年までずっと一度も日本人に譲らずに首席で通し、四年修了で最難関の東京第一高等学校に合格しました。終戦直前にそれを予知したのか故郷に帰り、旅順工科大学予科に転校しました。二中に在学中から彼には一目置き、敬服しておりました。戦後、日中国交回復の後、彼が来日する度に、東京・大阪・名古屋・福岡の各地近隣のクラスメート挙げての大歓迎で、親交を深めておりました。平成17年（2005）4月に彼は惜しくも亡くなりました。

昭和15年（1940）は、皇紀二千六百年に当たり、日本全国に亘って種々の祝典が執り行われました。丁度私達が中学二



家族揃って（父のみ不在）昭和15年

年の時でした。大連に於いても、学校内で各種の祝賀会・運動会などが開催されました。祝賀ムードは、11月10日の紀元二千六百年祝賀式典で最高に盛り上がりましたが、これが終わると急速に日常生活に逼塞感が漂い始めました。物資が不足してきて食料は配給制に衣料も切符制にと、日常生活は随分窮屈になってきましたが、大連は日本内地に較べれば、未だましな方だったようです。

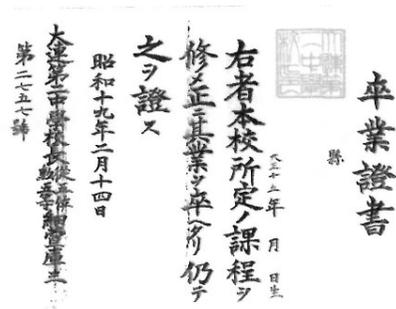
少し遡りますが、二年第一学期に担任の先生から陸軍幼年学校受験を薦められ、一時はその気になっていました。処が夏休み終了間際に、急性盲腸炎を患い、大連日赤病院で入院・手術をし、二学期初めから約1ヶ月間の病欠が続き、復学したら学業遅れが祟り、黒板が視え難く近視となり、幼年学校受験は断念せざるを得ませんでした。これで軍人にならずに済みました。



大連二中五年一組
海兵入校者壮行会

二中では、三学年のときに、約1ヶ月かけて九州から関東の各地を巡る修学旅行が例年行なわれており、そのための積立もしておりましたが、この年からは中止となりました。そしてその翌年の昭和16年(1941)12月8日、遂に大東亜戦争が勃発しました。それからは授業の合い間に大連船渠や周水子へ出掛けたり、旅順の関東神宮ご造営への奉仕もありました。斯くして余り授業を受けることなく、卒業を迎えることになりました。

常盤小の「われらが母校 名はこれ常盤」と同様に、クラスメートに呼び掛けて、各種資料や写真を収集し、「大連二中とはち会」(十八回生の回顧とはち会の歩み)を、平成17年(2005)8月に40部作り、実費二千円で頒布して大変喜ばれました。



大連二中卒業證書

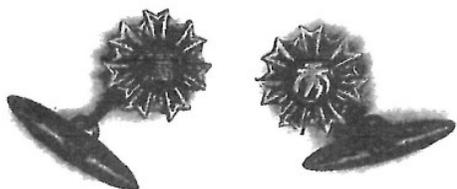


二中第十八回生バッジ



大連二中とはち会 表紙

二中ゆかりの思い出の品があります。一年生修了で授与された学業「優等賞」と、五年生時の模擬試験高得点「優秀賞」と云う、二つのバッジです。受賞から一年間は右胸に着用を許されていました。内地へ引揚げ後、長兄友人の電器屋で、ネジ棒の代わりにカウスボタン用の鎖をハンダ付けしてもらい、ワイシャツ着用時に使用していましたが、優等賞の方のハンダがとれて落としてしまい、いくら探しても見つからず、今は優秀賞の方だけが残っています。未だに残念でなりません。

優等章・優秀章バッジ
(カウスボタンに改造)

(3) 二中愛鳩部

私の次兄が自宅屋上で5羽ほどの鳩を飼育していて、それを手伝っている内に、私が後を継ぐことになりました。私は二中に入って部活動には愛鳩部を選び入部し、卒業までずっと愛鳩部部員を続けました。ですから二中時代の記憶と云えば、愛鳩部のことが最も印象深いものがあります。

二中愛鳩部は、昭和9年(1934)4月に発足し、当初は「愛鳩会」と呼称していましたが、同11年(1936)4月に「愛鳩部」と改称、同16年(1941)4月には軍隊式に「愛鳩班」になり、更に戦時色深まった同18年(1943)4月には「軍鳩班」と呼び名が変わりました。

愛鳩部では、上級生が下級生を苛めるとか扱ごくことなどは一切なく、日常和やかに上下隔てなく接して指導実習する風潮があり、今にして思えば、部活動を通じて人格形成などに大いに役立っているものと、確信できます。

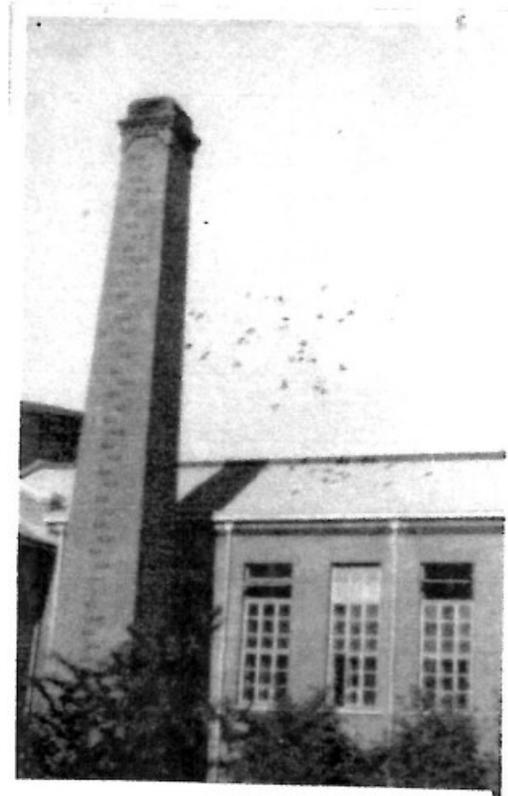
日常部員の活動は、相手が生きものですから、年中一日たりとも休みなしです。五年生を除き、一年～四年生部員を数組に分け、日毎の当番を担当します。早朝登校して、先ずは全鳩を鳩舎から出し、校舎の上空を半時間ほど飛翔運動をさせます。その間に下級生は、鳩の排泄物で汚れた鳩舎内を清掃し、朝の餌さを用意します。上級生は巣箱内の抱卵、育雛の様子などを見て回ります。昼休みは自ずと鳩舎周りや部室に屯し、奔放に過ごし



自宅旧鳩舎



大連二中愛鳩部鳩舎全景



大連二中愛鳩部飛翔訓練



巣箱内抱卵する親鳩

ます。放課後も当番の作業は朝と同様で、一切を終了して下校できるのは概ね夕暮れとなりました。

当時、生後半年くらいの多くの若鳩を、初めは鳩舎の直ぐ近く、関東州庁前の広

場から放鳩訓練をしました。次には二百メートル先の花園広場から、その次は一キロ先の電気遊園(小村公園)から放す、と云うふうに段々距離を伸ばしていきました。週末には汽車で金州、普蘭店など

へ出掛け、更に遠くには夜行列車に乗り籠に容れた鳩を運んで得利寺、大石橋、遼陽、奉天へと順次足を伸ばし、翌朝放鳩します。近距離の場合はほど帰って来ましたが、距離が伸びるにつれて戻って来ない鳩もありました。鳩舎では当番が待機していて、帰巢本能で飛び続け戻って来た鳩を收容します。放鳩して帰校すると、鳩はとっくに鳩舎に帰っていて涼しい顔をしてると云う次第で、無事帰巢した鳩の姿を見るとホッとしたのです。

一般的には、鳩の成長は結構早いものです。餌さの主体は玉蜀黍、白豌豆、麻の実の混合餌で、大豆や高粱は与えませんでした。特に良いのは麻の実で、それを与えると卵をよく産みました。時には消化剤として、塩土（エンド）と云って、煉瓦と牡蠣の殻を砕いて粉にしたものを塩と水で練りタドン状に丸めて乾燥させたものを突つかせていました。

初めの頃、名称も平和的な愛鳩部と云うくらいでしたから、私達の部活動は戦争と全く関係ありませんでした。その後、軍鳩班と名が変わり、関東軍が年二回子鳩を買上げるようになり、班としても子鳩の増産を図らねばならなくなりました。勿論、私達は金儲けのために鳩を飼育するつもりは全くありませんが、軍の要望に応えると云う一種の矜持にはしていました。

買上げには、簡単な検査がありました。胸骨屈曲の有無、咽喉内ジフテリア爛れの有無をチェックします。検査に合格し

た三十羽から五十羽を毎回買上げてもらいました。一羽 5 円で当時としては結構いゝ価格で、その代金は全て班の資金に受入れ、主に鳩の餌代に使用して、いゝ餌さを与えられるようになりました。当初は、学校からの活動費予算で賄っていましたが、関東軍のことがあって以来、予算が削られても資金は潤沢で、班の活動に支障はありませんでした。

学校では軍事教練の授業が週に数時間ありました。その他にも野外演習があって、生徒は個々に三八銃を担い隊列を組み郊外へ行軍します。軍鳩班員は、十羽ほどの鳩を入れた籠を自転車の後部に積み、行軍の後について行きました。途中の要所々々でその場の状況を通信紙に記載し、小さな丸い通信筒に入れて、鳩の片脚に装着して放ちます。行軍は目的地に達すれば、敵味方に分かれて匍匐前進・突撃などの演習を行ないます。その演習状況を詳細に通信紙に記し、従前同様に処理します。

鳩舎で待機の留守番班員は、帰還した鳩を收容し、通信筒の通信紙を在校の軍事教官に手渡します。

全ての鳩を放ち終えますと自転車で先に帰り、鳩の世話をします。

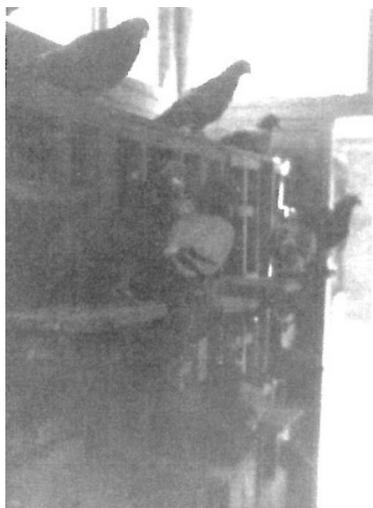
軍鳩班の班員は、実技演習に参加していませんが、演習の一環として通信文報告に伝書鳩を放鳩することで参加していて、何も忌避している訳ではなく、また、教練教科の評価が低かったと云うこともありませんでしたし、学校当局にも公に

認められていることでした。

戦前から続けられていました市内全中等学校体育大会は、毎年大連運動場で行なわれていました。開会式の後に各校鳩部の一斉放鳩があり、しばし上空に鳩の勇壮な飛翔が続き、やがては夫々の鳩舎へ向けて去って行きます。愈々各校の対抗競技が始まり、選手の熱戦と相互の応援合戦が終日場内一面を蔽いつくします。放鳩を終えた部員は、野外演習の時と同様、応援合戦に加わることなく帰校し、帰ってきた鳩を鳩舎に収容します。



馴致網内に出て水浴び



鳩舎内部



通信筒装着の伝書鳩



孵化直後の雛鳩

戦時になって、シンガポール陥落などの記念祝賀行事が、大連神社社前や忠霊塔広場で、全中等学校生徒参加の下に行なわれました。式典終了後に、各校鳩部の一斉放鳩は、大連運動場に於ける体育



愛鳩部卒業生を送る



大連運動場での放鳩



大詔奉戴日 放鳩帰巢待機

大会と同じ要領でした。

全校生徒はその後に市内を行進して帰校しました。

戦況不利の状況になり、祝賀式典に代わり、毎月八日は大詔奉戴日として、全校生徒は木銃を携行して登校前に、大連神社または忠霊塔前に集合、全員整列して戦勝祈願を行なった後、市内を行進して登校しました。初めのうちは放鳩行事も続けていましたが、終盤には打切られました。

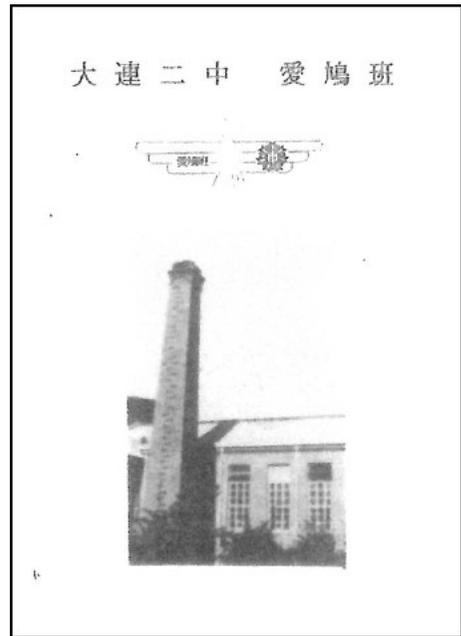
大連の中等学校の大連一中、大連二中、大連中学、大連商業の各校には、夫々鳩部がありました。女子校では唯一、神明高等女学校にありました。協和実業など中国人学校にあったかどうかは知りません。偶に競翔会などで顔を合わすくらいで、普段は各校間の交流はありませんでした。

小生所持の他、旧部員に呼び掛けて、資料を収集取纏めて、小冊子「大連二中愛鳩班」を40部作成し、平成17年(2005)6月15日に、名簿上の存命者に無料配布して、先輩諸賢からも多大の感謝称賛を受けました。

引続き、旧部員に「愛鳩部大集合」を呼び掛け、平成18年(2006)10月11～12日、於：熱海市網代・ムクデン満鉄ホテル、参加6名で、「大連二中 愛鳩部 懇親会」を催し、24名の方に開催報告をしました。

“NPC”(2599) & “Nichu Pigeon Club”(2600)のバッジ二つが、15回生

安田靖一先輩から保管方を託され譲り受けました。(2600)の方は、紀元二千六百年記念に作られたもので、私も持っていたのですが、引揚げ後暫らくして紛失してしまい残念至極の思いでしたので、大変懐かしい思い出の品で、未だ英語が使える時代でした。貴重な二中愛鳩部の記念品として、大切に保管しております。



大連二中愛鳩部 表紙



懇親会記念寄書き色紙



大連二中愛鳩部懇親会



2599



2600

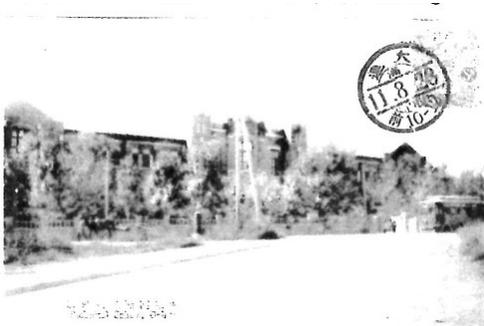
愛鳩部バッジ二個

(4) 南満洲工業専門学校 鉦山工学科

昭和19年(1944)4月、私は南満工専鉦山工学科に入学しました。元来、物理・化学は嫌いで、地理・歴史が好きな文科系、しかも商売人の子が、市内には大連高等商業学校(後の大連経済専門学校)があると云うのに、何故に理科系の工業学校へ進学したのでしょうか、不可解な気もしますが、それも当時の世相風潮の所為でした。



鉦山工学科生一同(新入生歓迎会)
昭和19年4月 満洲資源館前



南満工専校舎正面全景



鉦山工学科第一学年クラス会
昭和19年5月 東京菜館



南満工専入学記念



南満工専制服制帽

その頃、理科系学生には徴兵猶予があつて、専ら文科系学生が徴兵されていました。戦局厳しく、その措置は撤廃されて理科系の有利性は失われていましたが、一縷の望みを托して父が私に工専進学を薦め、私自身も二中卒直後に見た主演岡譲二の映画「男」で、隧道工事に従事する男らしい姿に憧れを抱き、工専鉅山工学科への進学を自らも納得し、推薦入学の手続きがとられ無試験で南満工専へ入学しました。

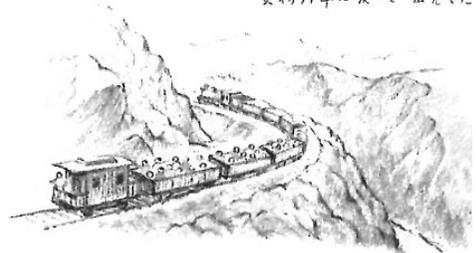
暫らくの間は、基礎学科の授業を受け、学校周辺での測量実習もありました。そのうちに勤労奉仕に狩りだされ、大連船渠や大連機械の工場に通いました。また、黒石礁先きの砂浜海岸を掘り起こす巨大なドッグ工事に、泊込みで従事しました。これが完成すればコンクリート船を造るとのことでしたが、果たして実際にコンクリート船が造られたと云うことは聞いておりません。

(5) 弓長嶺鉅山

昭和20年(1945)4月、南満工専二年に進級すると間もなく、満洲製鉄(株)弓長嶺鉅山へ学徒動員で出動することになりました。弓長嶺駅は、遼陽と本溪湖を結ぶ鉄道線の間中にあり、回りに小さな中国人集落が散在して、鉅山はそこから更に山深い処で、鉅石搬出用の鉄道が敷設されていました。4月15日に丹羽助教授に引率されて弓長嶺鉅業所に着任しました。事務所には、工専15回生の浦田安栄

先輩が課長としておられ、我々(23回生)の指導を担当され、いろいろとお世話になりました。浦田先輩から職務概要の説明を聞いた後、近くの社員寮に案内され、四畳半の二人部屋があてがわれました。

弓長嶺と云ふ所に良質の鉄鉅石の出る鉅山があるので、學校から見學に行く事になった。學校からの太子河のほとりから屋根無しの貨物列車に乘つて出かけた。



はじめは平坦な地形だったが次第に山合の峻谷となり私はボートに乗りかたと入れ替へたつて「ケボレ」ヤリながら風景を興した。弓長嶺に着くとそこは鉅山技士達の住宅があり辺りを行なうて小さな食料雜貨店と花壇などがあつた。所々の説明を聞いた。

弓長嶺へ向かう列車

“昔を今に”より大連一中みどり会



弓長嶺鉅山 所在地地図



弓長嶺鉱業所事務所前

弓長嶺第二鉱区
堅坑を下り切作業の実働弓長嶺第三鉱区
インクライン設計測量実施

8月迄の前般二ヶ月は、磁鉄鋼を産出する第二鉱区で、毎朝トロッコで坑道の奥深くまで進み、滑車付き木枠箱で堅坑を降下し、各坑道最先端の切羽での採掘作業を監督するのが任務でした。デパートのエレベーターとは異なり、吹き曝しの木枠箱での堅坑の急降下は、一種恐怖心を味わされます。坑道の奥に進むときは、カンテラと小鳥を鳥籠に入れて持参します。悪性ガスの予防対策の必需品でした。切羽では鑿岩機で数箇所に穴を開け、ダイナマイトを装填して爆破し、粉碎した鉱石をトロッコに積込み運び出します。現場での掘削やトロッコ積込み作業などは囚人や俘虜が殆どで、無防備で現場に立入るには、かなりの勇気が必要とします。危険はまだあります。鉱石搬出に便利なように、上階から下階へ落とす蟻地獄状の穴があり、見た目には平坦ですが、一步足を踏込むとずるずると沈み込みます。私も一度はまり、必死に逃れました。このように、危険との隣り合わせの毎日でした。そして、宿舎に帰ってからがまた毎日大仕事でした。脱いだ衣服を沸騰した湯に浸けて、筋目に真っ赤に並んだ蝨を一粒づつ潰す作業に大車輪でした。

後半は、五軒ほど山奥に入った未開発の第三鉱区へ徒歩で通う毎日でした。こゝには赤鉄鋼が埋蔵されており、採掘開発用インクライン設置のための測量図作成が任務でした。現場が遠く、炎天下に陽を遮る処もなく難行苦行の作業でし

た。測量技術を実際に試せる仕事で、一同張り切って対応しておりました。苦力と接することなく、我々だけの作業でしたから、蝨対策からは解放されました。我々は学徒動員としては、待遇は良かったと思います。宿舎は開放的で、帰寮すれば、食事は用意されており、入浴も自由でした。酒・煙草が毎月定量無償で配給され、当時私は未成年なので、押入に一杯山積みに溜り、同僚によくねだられましたし、時々町へ出掛け煙草と豚肉の物々交換をして、皆で肉鍋を囲み食しました。

また、一般の初任給ほどの手当をもらい、貯金して裕福に過ごしていました。後日内地での動員状況などを話に聞き、本で読んだりして大違いが分かり満洲は全く大陸的漫々的で悠長だったのだなと、沁々思い耽る時もありました。昭和20年(1945)8月12日に、私は弓長嶺で突然一通の電報を受取りました。第二国民兵の徴兵令状(赤紙)が来たとの連絡内容でした。私は早速山から降り同僚2・3名とともに、遼陽で汽車に乗り大連に戻りました。15日午後3時頃家に着き、親に直ちに出頭する旨申し出ましたら、正午に終戦の詔書が発せられ、戦争の終結を知らされました。私は憲兵隊に出頭しましたが、自宅待機を命ぜられ、そのまま音沙汰なく戦場には行かずに済みました。若し、動員先でなく大連にいたとして12日に即時入隊していれば、捕虜としてシベリア抑留の憂き目を見たかも知

れません。第二国民兵乙二種の当時の体力では、とてもシベリア抑留には堪えられなかっただろうと思います。

浦田先輩は、終戦後に弓長嶺鉱業所内機電設備のソ連本国へ移送のための撤収作業に従事した後、12月下旬に鞍山の満洲製鉄(株)本社へ引揚げ、更に翌昭和21年(1946)3月下旬に鞍山を脱出、大連の夫人の実家に家族4人が身を寄せました。同年11月中国経済建設のため技術者として残留すれば、家族の生活も保証されると云うので中国経済建設学会に入会し、留用されました。以後は満洲各地を転々とし、昭和25年(1950)2月には、撫順磁務局総合計画科長に任命され、中国人と差別のない待遇を受けられました。



浦田先輩社宅前にて
(前列右二人は近所の子)



鉦友会 23 期同期会
浦田先輩夫妻を迎えて

その後、体調を崩して昭和 28 年 (1953) 8 月、2 人殖えた家族 6 名とともに舞鶴港に引揚げられました。

浦田先輩の帰国を知った鉦山工学科弓長嶺動員の面々は、浦田先輩ご夫妻を招き、平成 10 年 (1998) 10 月に、鉦友会 23 期同期会を開き、弓長嶺を偲び感謝の意を表し、旧交を温めました。

五、戦争終結と引揚げ

(1) ソ連軍満洲に侵攻

天皇の“玉音放送”による戦争終結、日本の敗戦は、しばし信じられませんでした。原子爆弾が広島、長崎に投下されて、壊滅的な打撃を受けたことは満洲では報道されず、玉音放送も私は直接聴取していなかったし、ソ連の参戦も日ソ中立条約がまだ有効の筈だと信じていただけに、眼前に突然戦車が現われて一挙に奈落の底に突き落とされた思いでした。

昭和 20 年 (1945) 8 月 22 日、ソ連軍の大型戦車が大連市内に入ってきました。中国人が赤旗をかざして群がり、駅前は

大騒動でした。それまでは日本人と中国人の間は平静を保っていましたが、この時から状況は一転して、険悪の度合いが深まりました。連鎖街も一斉にシャッターを閉じ沈黙の街と化しました。そして、大連市は 8 月 23 日をもって旧露名ダルニー市に復帰されました。

直ちに、ソ連軍兵士による家屋侵入・掠奪が始まりました。それに続き中国人の掠奪もひどく筆舌に尽くし難いものでした。治安維持の保安隊までが、点検と称して私達から物を徴発して行きました。丁子屋にはある程度の服地、裏地、ポタン、ミシン糸などの在庫品がありましたが、それらは全部掠奪されてしまいました。彼等は容赦なくあらゆる物を持ち去り、私達は全く阻止することはできず、たゞ呆然と見ているだけでした。

当初ソ連軍の司令官はヤマノフ少将でした。部下のすることを放置していました。最初に進駐したソ連軍兵士達は、数ヶ月前までベルリン攻略の激戦死闘を経てシベリアへ転属されたらしく、全て手甲に囚人番号の刺青をし、軍服はボロボロの将兵達でした。また、ソ連軍兵士の暴行によって大勢の女性が傷つけられました。ソ連軍兵士は「女を出せ (ダワイマダム)」と云いながら、民家に侵入してきました。女達は必死に逃げ廻り身を隠しました。我が家に来た時も、姉は三階のベランダに隠れて無事でした。彼等は東洋人の人種区別がつかず、日本人、朝鮮人、中国人は皆同じに見えるらしく、

中国人女性も数多く犠牲になったようです。

私の万年筆数本・腕時計 2 ヶと目覚まし時計も、ソ連軍兵士に奪われました。一本の万年筆はインクが切れていて書けず、直ぐに捨ててしまいました。目覚まし時計のベルが突然鳴りだし、止め方が分からなくてマンダリン銃で乱射し壊してしまいました。この話は私個人が体験したことであって、決して笑い話ではありません。放火こそありませんでしたが、あらゆる奪略強盗強姦行為に対する批判はソ連本国にも知れ、ヤマノフ少将は左遷され、後任に9月10日コズロフ中將が着任しました。その後、治安は平静になり、不法奪略する者は兵はもちろん将校でもゲーペーウ（ソ連の憲兵）に連行されました。

また、10月2日からソ連軍票が大量に大連市内に出回わり、従来流通の朝鮮銀行券・満洲銀行券は影を潜め、軍票と鮮銀券・満銀券の間には2倍から3倍の闇打歩を生じていました。



大連に進駐したソ連軍戦車部隊

ボロボロだったソ連軍将兵の服装身なりが整ってきたなと思っていましたと、急に姿を消し入れ替わりに、またボロボロ軍装のソ連軍兵士がやってきます。1ヶ月程して見違えるように身なりが整うと交替するの繰返して、時には裸足の女性の兵士や将校も、いましたが、やがてヒール靴を履き、和服地で仕立てた美しいワンピース姿に変身して街中を闊歩し、買物に余念がありません。恰も、物資調達を兼ねた戦後報償の慰安旅行でも楽しんでいるようでした。

(2) ソ連軍占領下での生活

治安も漸く落ち着きを見せ初めましたが、生活不安が深刻に人々の心を包み込みました。父は一階店舗と三階工場を中国人に賃貸し、家族はそのまゝ二階に住んで、お互いの生活には干渉しないことにしました。その後は、中国人の入居によってなのか不法侵入は止み、安全に暮らすことができました。

戦争末期には、洋服店の営業は統制組合組織に統合され、三階の工場も閉鎖して二十数人いた中国人仕立て職人も、その頃は全員辞めて無人でした。父は、日頃から彼等の面倒を良くみておりましたので、彼等も父を慕い、戦後の我が家の生活を心配して、出来る限りの援助してくれました。父に、生活の不便はないか、「掌櫃（ジャングイ、旦那さん）お米まだあるか」と聞き、時々米や肉を持って来てくれました。お蔭様でお米は米櫃

のブリキ缶一杯に溜り、毎日食べることが出来ました。多くの日本人から敗戦後に苛められた話をよく聞きますが、我が家ではそのような目に遭うことはなく、寧ろ氣遣われて大事にしてもらったと云えます。引揚げ帰国して内地の食糧事情が酷く、主食が芋や冬瓜なのには些か驚きました。



中国人へ貸店舗（元丁子屋）での営業

壹佰圓軍票



拾圓軍票



伍圓軍票



壹圓軍票



ソ連軍票

北満から避難してきた開拓団の人達は、悲惨としか云いようがありません。閉鎖後の学校に身一つで収容され、売り食いするものもなく、衰弱した体に鞭打ち、苦力として働き、死を待つばかりの日々に、運動場は忽ち墓地に早変わりしたとのことでした。このようなことが大連の身近な処にも存在していたとは、当時は露知らず、引揚げ後に本を読み初めて知って、これも驚きのひとつでした。



街頭で衣類の立売り

“昔を今に”より大連一中みどり会

やがて売り食い生活のため、持ち物処分や委託販売に人々は街頭に立ち、“立売り”が始まりました。数着の衣類などを腕や肩にかけ、中国人やソ連軍人に売ると言う自衛手段です。私も母の和服を持ち常盤橋辺りに立ち、物売り経験をしました。しかし、この方法では、物を奪われることがよくありました。二、三人が物を見るふりをしている隙に、一人が遽かに物を盗み走って逃げます。両手に売り物を抱えているので盗むのは容易であつ

て、言い争いが起れば殺される危険性がありますので、奪われても追うことはしませんでした。事実、私の小学校の同級生が、中国人と言い争いで喧嘩となり、殺されたことがありました。街頭での立売りは身の危険もありますが、どこかに店を構えての販売なら危険度も避けられると云うことで、店内でブースを借りて販売する方法が流行りました。

そこで私も、昭和21年(1946)3月に、浪速町幾久屋百貨店二階表通り側の中間に、契約書もなしに、二ヶのショーケースを借り、邦人女性二人を雇って物品販売を手伝ってもらい、ブースの店開きをしました。開店の景気付けに、姉の豪華な総刺繍地振袖の嫁入り衣装を飾ると、ソ連軍将校が即座に金一万円で購入して行きました。その他、それまで掠奪されずに隠し持っていた腕時計、置時計などはよく売れました。しかし、漸く品不足になってきたので、幾久屋のブースは8月をもって店仕舞いにしました。



幾久屋百貨店

(天津街百貨大廈～天白大廈)

(3) 大連市政府の成立

昭和 20 年（1945）10 月 27 日、ソ連軍当局はヤマトホテルに各界の代表者を招き、大連市政府の設立を告げ、市長に遲子祥、副市长に陳雲濤を選出したことを明らかにしました。同時に大連市役所および日本行政官全員は退職することを命じ、同 30 日別宮秀夫市長は、ソ連軍司令官より正式に大連市長解任の通告を受けました。

同年 11 月 1 日嘗つての日本行政機関であった関東州庁庁舎で、中国人による大連市政府が成立。市政府は発足直後に、十一条なる「日本残留民に対する施政綱領」を公布しました。

先ず、日本軍および日本政府の財産を没収し、親日中国人、特務機関員を処罰する。次に、住宅調整運動（日本人を一人一畳半の割合で収容し、空いた家に中国人を入居させる）を実施する、（後述）などでありました。



堂々たる偉観を呈する関東州庁
（現・大連市政府）

(4) 大連日本人労働組合の発足

日本人は、難民救済と相互扶助、連絡を目的とする組織を個々に作り、危機を乗り切ろうとしていました。昭和 20 年（1945）12 月時点での日本人の代表的団体は、日本青年奉仕団と大連市民有志協議会が合流して組織された大連奉仕団やダルニー日本人青年連盟を母胎とする大連日本人民主義連盟などがありました。

12 月 5 日、これらの団体の責任者は、ソ連軍司令部に招集され、政治部副官ボズニヤコフ中佐から、「勤労者を中心とした労働組合のみを公認する。他の団体は 3 日以内に解散すべし」と命令されました。各団体の代表者達は一本化の協議を重ねましたが思想問題で意見が対立、遂には物別れとなり、その結果、大連日本人民主義連盟を母胎として生まれたのが、「大連日本人労働組合」でありました。

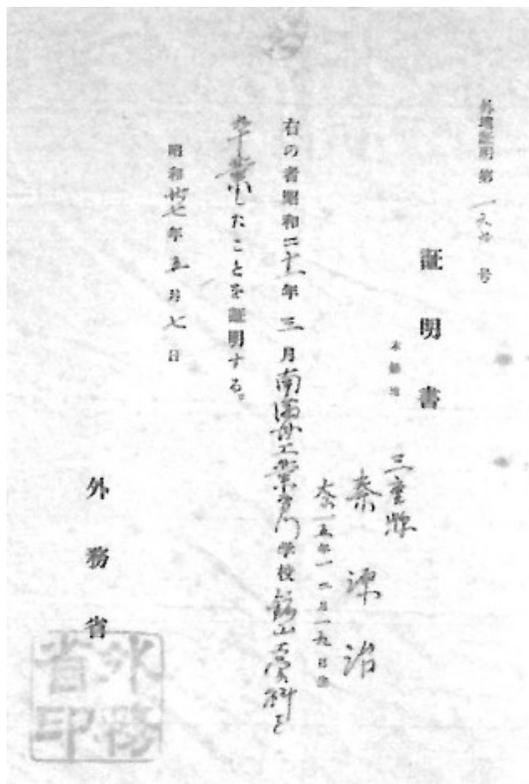
翌昭和 21 年（1946）1 月 2 日、大連日本人労働組合は、その設立をソ連軍司令部から正式に許可され、同月 20 日に結成大会を開いて発足しました。

同 25 日、労組は先ずは手始めに、緊急食糧獲得運動を展開しました。その資金を集めるため、委員会を結成、職務別、支部別に消費組合を結成し、消費者から借入金一千万円、寄付金百万円を予定し、これとは別に市中有力者 150 名を招集し一千六百万円の拠出を要請しました。それからは矢継ぎ早やに資金調達が課せられました。

労組は、ソ連当局からは食糧獲得と難民救済に、その後は引揚げ業務と云う大事業を、市政府からは住宅調整と大連市政建設公債募集の業務を負わされました。何れもそのための活動資金は自給自足であって、ソ連・中国ともに面倒な残留日本人工作は、全て労組に押しつけたのでありました。

労組は、事ある毎に次々と資金調達を有力者、各業界、各町内会に割当て、その取立てが、峻烈を極めて怨嗟を募り、大方の輿意を買うに至ったのでありました。

(5) 繰上げ卒業



南満工専 卒業証明書

昭和21年(1946)3月21日、私は南満工専を二年修了をもって繰上げ卒業となりました。その後、学校は3月30日中国側に完全に引渡し、南満洲工業専門学校の歴史的終末を迎えました。在学中は勤労奉仕・学徒動員に明け暮れ、工専での学業といえば、弓長嶺でのインクライン実地測量ぐらいしか思い当たりません。卒業証書は授与されませんでしたので、昭和27年(1952)5月に手続きを経て、外務省から卒業証明書の交付を受けました。

(6) 日僑人民住宅調整運動

住宅調整運動は、日本人住宅が日照通風とも快適な土地を占め、風光明媚な南山地区、嶺前地区など居住環境・立地条件など良い処に集中し、しかも中国人一人当たり0.5畳に対し日本人3.5畳の割合であるのを平均化するものとされました。また、労組はその運動方針を、次のように決定しました。まず、この運動を通して地区市民生活全体の問題を把握し、非常食糧獲得運動と結びつける。同時に戦争犯罪人、隠匿物資の摘発と、清算闘争を展開、大衆の意識を昂揚、積極的分子の発見養成に当たるとしました。第一回は昭和21年(1946)7月から10月末日、第二回は12月から翌年3月末日までに完了する方針で、第一回は8月に、主として日本人官僚、資本家の家屋を接収し、中国人家庭に与えました。第二回はこの期間に多くの日本人が引揚げ、3月末で一般引揚げは完了しましたので、大

量の空き家ができ、実施の必要がなくなりました。我が家には何も影響はありませんでした。

(7) 大連市政建設公債

昭和21年(1946)10月末、日本人の引揚げが決定した直後、大連市政府は十九条からなる「大連市政建設公債条例」を發布し、大連の産業経済文化復興再建のため、三億円を起債しました。一億八千

万円が中国人に、一億二千万円は日本人に割当てられました。利息は年利八厘で年一回配当、五年満期となっていました。

「戦後大連の各機構が破壊されたのは、元はと云えば日本との戦争に原因がある。日本人はその罪を償い、中国への思義に報いるために応募せよ」との趣旨でありました。確かにその趣旨は理解できぬことはありません。しかし、職を失った日本人は、難民救済・引揚げ・越冬資金と



引揚者国庫債券



引揚者特別交付金国庫債券

次々に労組から示される割当金に喘いでおり、その上に一億二千万円など、出せる訳ありませんでした。市政府から一括依頼された労組さえ、正直なところ晴天の霹靂であったと云います。と云って無視する訳にもいかず、引揚げ・越冬資金さえ集まらない苦境に、更に公債まで抱え込んだ労組は、大連市政建設公債日僑引受委員会を組織し、元・大連商工会議所会頭首藤定を委員長に据え、副委員長榊谷仙次郎・石堂清倫で、1月12日に発足しました。役員に労組員が僅か加わっているものゝ、委員長初め委員、地区代表など殆どに旧指導者階級が名を連ねています。それには理由がありました。公債を募集しても、こゝ1・2ヶ月で祖国に引揚げてしまう日本人にとって、利息は素より元本の払戻しを受けられる筈もなく、応じる者などないのは明白でありました。そこで労組は、引揚げ資金と建設公債を一本化して二億円の募金を同委員会に引受けさせ、委員会でそれを按分することにしました。更に同委員会は市政府に直結した独立機関であることを市民に印象づけ、首藤・榊谷を頭にし、労組色を払拭しての募金体制を執ったのでした。最早こうでもしなければ募金は不可能となったことを労組自体が認めたことにもなりました。一方で労組は、割当金納入の証明がなければ引揚げ許可は与えないと宣言し、脅しをかけたのでした。

割当金の対象区分は、第一対象者は一

千余名の戦争協力者、旧支配階級で、金額45万円以上、30万円以上、15万円以上の三段階に分け、第二対象者は資産家、戦後利得者とし、第三対象者はその他の一般日本人とされ、ともに査定は委員会と団体協議会に一任されました。この大連市政建設公債こそ、大連日本人市民が血を絞り、旧植民地で支払った個人賠償金でした。引揚げ後、日本政府が弁償するとのことでありましたが、死を賭けての別宮市長の請願も無視され、結局は年令別一律の引揚げ国庫債券の二回に亘る交付で済まされてしまいました。

(8) 引揚げ決定 ソ連軍労働組合に引揚げ業務委任

昭和21年(1946)5月14日から、中国国府軍勢力下の旧満洲地区邦人の葫蘆島引揚げが始まり、主に米軍貸与のLSTやリバティ型輸送船などにより、ほぼ完了したとの噂が流れているが、大連の引揚げはいつも噂だけで、やがては消え去るばかりでした。陸の孤島となった大連で二度目の越冬を覚悟した労組では、越冬対策協議会を発足し、運動方針を決定しました。

終戦から430日余の昭和21年(1946)10月23日、ソ連軍司令部から労組の土岐委員長に、日本人引揚げ決定の朗報が伝えられました。時期は明示されていないが、後日の正式指示を待ちそれまで冷静に職場と生活を守るよう、全市民に通

告されました。その頃の大連の日本人は、生死の分岐点ぎりぎりをさま迷っている時期でもありました。待ちに待った引揚げ決定に日本人市民は湧き立ちました。やっと見通しのついた明るさに、弾んだ声で冗談も飛び交い、笑いが渦となりました。

ソ連軍司令部は、日本人引揚げに関する業務を日本人労働組合に委任しました。労組は発足したばかりの越冬対策協議会を、そのまゝ引揚対策協議会へと転換し、急遽その準備にかりました。当時、大連では「日本人引揚げを労組が妨害している」と労組を中傷する噂が流れていました。ソ連当局、市政府とも、既に投げ出してしまった日本人困窮者の救済は、労組でも対策が立たず、引揚げ以外に解決策はないと考えていたのが事実でありました。しかし、表立って引揚げ促進を運動することは、現社会体制を否定する反動分子と極め付ける一派のため、差し控えていました。ソ連側からの引揚げ発表に、労組としてもホッとした、と云うのが偽りない処でありました。労組では、引揚対策資金は二億一千五百万円が必要と想定し、全市民に階級別に割当て徴収することゝしましたが、市民に労組不信が根強く労組による資金徴収は不可能と判断し、かつては反動呼ばわりした榊谷組榊谷仙次郎社長に協力を依頼して世話人代表に担ぎ出し、有産者階級および戦時協力者からの二億円獲得が課せられ、残り一千五百万円は地区一般人に割当てられ

ました。しかし、榊谷の努力にも拘らず、旧有産者階級は既に幾度も労組の強制徴収に応じ、吐き出すものは出し尽くしているのです。12月末時点では18%の三千六百万円に止まり、地域一般人からの募金は78%の一千二百万円が集められました。

労組としては、この大事業を市民の民主革命と絡めて行なわねばなりませんでした。二十万余の日本人のうち、一人でも多く思想改造して、日本に送り込む使命がありました。

年の瀬も迫まり、一部では引揚げが始まろうとしていた頃でした。連鎖街京極通りの喫茶店“紫咽荘”に青年男女が集められて、労組のオルグから、『「大連引揚げの歌」が出来た。これから歌唱指導をするので、よく覚えて皆に伝え、意気盛んにして祖国へ帰るのだ』と云うような話があつて、繰返し演奏があり、幾度も歌って覚えたものでした。イデオロギーは兎も角、愈々日本に帰れるのだ、と云う喜びを噛み締めながら、この歌を歌っていました。私にとっては、懐かしい大連思い出の曲の一つです。歌詞を次に掲げます。

大連引き揚げの歌

作詞・作曲 山下 久

一、耳を澄ませばふるさとの
岸邊を洗ふ波の音
瞼（まぶた）の裏に浮かぶのは
あゝ遠近（おちこち）の山の色

船が来た来たなつかしい
祖國へ歸る船が来た

二、山の有様野の景色

昔のまゝにあるかしら
僕の生まれたあの町は
冬の月照る焼け野原
この眼で見よう戦争の
あとの祖國の苦しみを

三、民主大連船出して

民主日本へ水脈（みお）を曳く
歸る祖國の山川が
よし崩（くず）れても破れても
そこが我らの新天地
自由のための新天地

(9) 我が家の引揚げ記録

昭和22年（1947）1月になって、引揚船の回航が順調に運び、目に見えて日毎に日本人の姿が街中から消えていきました。残余の引揚げ待機者と技術残留者のみとなり、我が家の引揚げは何時になるのか、心細い思いが募るばかりでした。

洋服商を営んでいた父は、商業営業者として第一対象者にランクされていたのか、大連市政建設公債七十五万円の割当てがあり、割当金納入の証明がなければ引揚げ許可が下りないと脅かされていたので、父は何とか工面して納めたのを見聞きました。3月下旬、漸く我が家にも引揚げの許可が下り、22日に永らく住み慣れた我が家を捨て、荷馬車に荷物を

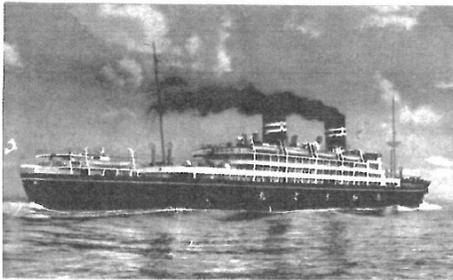
積んで収容所に入り、そこで一週間滞在しました。その間に手厳しい荷物検査を受けました。布団袋から出して積み上げた衣類を前に、家族人数を尋ねられたので、父、母、私、弟、姉、姉の赤ん坊の六名と答えると、検査官のソ連兵は「それでは一人6枚もあれば充分だろう」と云って、36枚が返って来ました。しかも、夏浴衣、寝巻、ワンピースも一枚のうちに、大島紬の着着物・羽織の揃いも羽織だけが戻り、数合わせの無情な取扱いでした。

内地に居る二人の兄達も不自由だろうと、私の寸法で新調した三つ揃いスーツ類は全て没収されました。印刷物、記録物、写真、貴金属、一人千円以上の貨幣は全て持出し禁止とされ、若し所持者が発見されると、その所属団は全て乗船取消しと云う厳しい指示が出ていましたので、極力整理してこれだけとは絞って自粛していたのですが、要領のよい団では責任者が相応のプレゼントを用意し、素早く係官のポケットに滑り込ませて検査を素通りした、と云う話を後日耳にしました。

3月29日に引揚船高砂丸に乗船し、涙の“さらば大連！”を告げ、汽笛を合図に大連港を出港しました。

因みに、戦時中生き残った1万噸クラス豪華客船と云えば、北米航路 神戸～シアトル線の日本郵船“冰川丸”（11,622噸）と、台湾航路 神戸～基隆線の大阪商船“高砂丸”（9,347噸）の、僅か二隻が命長らえたのみと云う悲惨な状態でした。

その生き残り船に乗船出来るとは、願ってもない幸運でした。しかも、高砂丸來航 4 回のうち、3 回は 3 千人程の乗船輸送でしたが、最後の 4 回目は我々一般人最後の引揚者 886 人のみで、ゆったりとした豪華な船旅でした。翌 30 日出港の大連第一次引揚最終船恵山丸には、引揚業務を終えた労組関係者 2,673 人が乗船していたそうです。



大阪商船内台連絡船高砂丸

六、日本内地に初上陸

(1) 佐世保針尾収容所

高砂丸が佐世保港に入港後、船内で検疫を受け、4 月 3 日に上陸して DDT の洗礼を浴び、漸く徒歩で旧海軍兵舎の針尾収容所に着き、そこに収容されました。私にとっては、日本初上陸の第一歩でした。

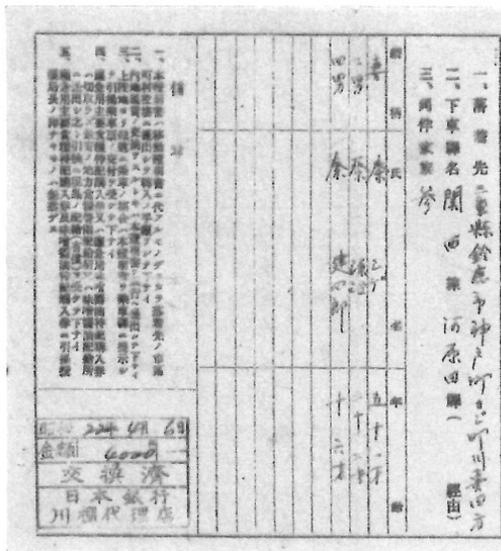
直ちに部屋割りがあって、やっと腰を下ろすことができました。佐世保引揚援護局で、一人当たり千円の現金と若干の衣類が支給され、引揚証明書が交付されました。長崎税関には所持していた朝鮮銀行券、ソ連軍票、満鉄株券などが保管証と引換に収監されました。これらは数年後に返還されましたが、ソ連軍票だけ

は風化のため処分されて戻りませんでした。針尾収容所には四日間滞在し、7 日の早朝に南風崎駅から引揚列車に乗って名古屋に向かいました。汽車の窓はガラスがなく、全部板張りでした。途中翌日未明に姫路に着いたので窓を開けたら、姫路城がくっきりと見えました。これには感動の一瞬でした。生まれて初めて日本に来たのだ、と云う感触に興奮を覚えました。汽車は山陽本線から東海道本線に入り、8 日未明に名古屋駅に着きました。こゝには兄達二人が出迎えにきておりました。兄達は復員後、これから私達が向かう引揚げ先の叔母方に既に寄寓しておりました。国鉄荷物取扱場で荷物を引取り、近鉄電車乗車口へ移動して始発電車に乗換え、終着駅の伊勢神戸駅に下車、到着先・三重県鈴鹿市神戸鍛冶町 424 番地仏具商・川喜田光治郎（母しげの実妹きんの夫）方に、漸くにして迎り着きました。大連の住処を出て 17 日目のことでした。かくて、昭和 22 年（1947）4 月 11 日、手続きを経て、鈴鹿市住民となりました。

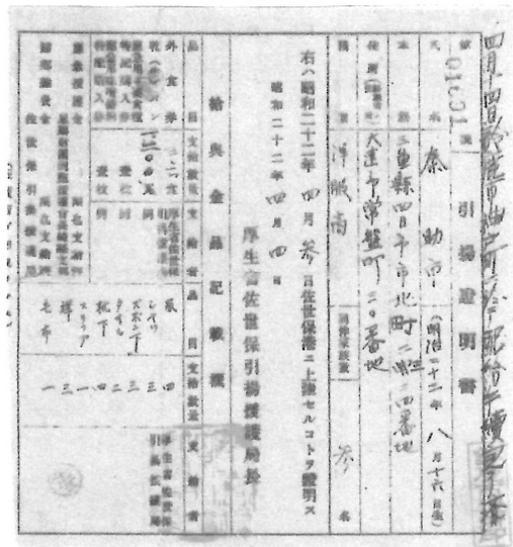


佐世保港上陸

針尾収容所へ向かう引揚者



裏面



表面

引揚証明書

(2) 帰国後の暮らし

無事家族一同が勢揃いし、私にとっては新天地の日本内地での生活のスタートが始まりました。衣服類を殆ど失い、大連での普段着ジャンパーが一張羅、着の身着のまゝの見窄らしい姿に、工専時代の校章そのまゝの学生帽を被っていました。

佐世保で支給された千円以外は無一文状態の上、郵便貯金の払出しは月五百円に制限され、なけなし持参品の売り食い生活を余儀なくされました。それに米穀配給の不足補いの食料確保が最難関で、自転車でリヤカーを牽き、田舎の農家に南瓜や芋類買出しの日課に明け暮れました。このような状況下では、進学の遣り直し希望も断念せざるを得ませんでした。

当時、父は京都へ出稼ぎに行っていて不在で、時折仕送りがありました。長兄一郎は食料配給公団神戸支所に勤務、次兄茂治は明治大学を休学中で、四日市市諏訪新道の丁子屋商店（京城丁子屋百貨店二代目社長小林源六夫妻が引揚げ後開店将来は洋服店復活を期していました）に住込み、雑貨店の店員をしていました。

6月某日、GHQより東京丸ノ内ビルに召喚を受け出頭しますと、大連に於けるソ連軍の動向につき、質問を受けました。交通費は全額支給されました。

何時までも叔父宅に世話になっている訳けにも行かず、借家を探して鈴鹿市神戸北萱町一九八番地（借家 武蔵方）に、7月8日に引越しました。

同年8月、次兄茂治が明治大学に復学

のため丁子屋商店を辞めましたので、私が代わりに住込み働くことになりました。こゝでも、自転車にリヤカーを曳いて四日市郊外まで味噌・醤油樽の仕入に行きました。津まで行った時には、復路白子辺りで自転車が漕げなくなって押して歩き、神戸の我が家を横目に見ながら寄り道もせず、やっとの思いで店に帰りました。

(3) 百五銀行に入行

その年10月、借家隣人の百五銀行行員（富田支店副長）が銀行就職を口利き下され、面接試験を受けました。その際に提示した二中の通信簿に印刷の「実行七則一、外国人ニ対シ公正ナル態度ヲ持ツコト」を読んだ一重役から、『流石外



百五銀行神戸支店勤務



昭和23年正月 家族全員が揃う新年記念

地の学校だけあってこう云う心遣いの教育が施されていたんだね』と感嘆の言があり、誇らしい気分を満たされました。幸いに採用通知を受け、昭和23年(1948)1月1日付け中途入行し、4日より百五銀行神戸支店(昭和28.10.1 鈴鹿支店に改称)に初出勤しました。ここで、世にも不思議なことが起こりました。神戸支店に出勤すると、大連二中の同級生丘友二郎とぼったり顔を合わせました。彼は先に帰国していて、祖父二代頭取岡嘉平治(のちに丘襄二)の縁故で曩に百五銀行に入行して神戸支店白子出張所詰めでした。のちに河芸支店でも一緒に勤務しました。

昭和23年(1948)は、戦後家族全員(姉婿片柳隆次郎はシベリアに抑留中)が揃って初めての新年を迎えました。それを記念して写真撮影をしました。

(4) 家族の東京移住

義兄片柳隆次郎は、昭和24年(1949)4月に、永徳丸でソ連シベリア抑留から還り、舞鶴へ上陸し復員しました。東洋時計(株)に復職し、東京に姉ツナ子と幼女春子を呼び寄せ、親子水入らずの世帯を持ちました。一方、昭和25年(1950)6月頃、父助市・母しげ・長兄一郎・弟建四郎の4名は、東京都新宿区花園町27番地へ転出し、次兄茂治と合流しました。父と一郎は、初代小林源六の甥小林源次郎とともに神田小川町にて「丁子屋テーラー」を創業しました。茂治は松岡塗料(株)

を辞し、住居の一部を改造して「丁子屋塗料店」を開業しました。私は既に百五銀行に就職していましたので、そのまま独り残留し、単身自炊生活に入りました。

七、大連関連資料の収集

(1) 大連追憶

私は大連にいたとき、日本内地のことは全く興味がなく、特別な印象は一切持っていませんでした。幼年時代から過ごしていた大連では、人力車夫は全て中国人がするものと思ひ込んでおり、日本に初めて来てみて、日本人が人力車を曳いているのを見て異様な感じがしました。このことから見ても、当時の私は無意識のうちに植民地支配者として君臨しておりました。思い上がりも甚だしいと云われて当然ですが、その当時は植民地に暮らしていたと云う感覚は全くありませんでした。今にして反省すること頻りです。

近代化の都市大連から戻って、帰国後に見た日本は田舎は田舎の感覚で、名古屋や東京の都会へ行っても、全く驚きも喜びも感じませんでした。多分戦争中空襲に徹底的に破壊され尽くした残骸に過ぎない哀れな姿を見せられたからでしょう。今でも大連の方が余程良かったと思っています。

戦後の名古屋は、一面の焼野原でした。それでも広小路通りの辺りには、ビルの残骸が焼け残っており、都会らしさの面影は想像できましたが、特別な驚きはあ

りませんでした。復興の兆しも見え始め、百メートル道路建設を自慢にしており、その意気や嘉しとしても、大連にはこのような道路は昔からありましたし、驚くに及ばず、東京に行きましても、大して感慨も湧かず、こゝの人達を大連へ連れて行き、在りのまゝの大連の姿を見せてあげたいくらいでした。大都市の基準で測れば、大連の方が余程進んでいたものと云えるようです。特に大連での生活面からみれば、日本人の一般住宅には、私が幼少のときから水洗トイレ設備がありました。大連の都市計画当初から下水道建設が優先して行なわれたと云われております。

帰国して日本の住宅建築を見て、吃驚しました。殆どが木造家屋で、冬は冷たい風が障子の隙間からヒューヒュー音をたてながら吹き込んできて寒く、汲取り式便所が普通でした。大連の屋外は寒いけど、窓は二重構造で寒気を遮断し、その上屋内にはセントラルヒーティングのシステムが暖気を運び、冬でも全然寒くありませんでした。当時父は冬でも夏の浴衣を着てビールを飲んでいました。今にして思えばパラダイスで暮らしている感じでした。

(2) 大連の資料と情報の収集

中学時代には、ずっと切手蒐集に興味をもっていました。切手の購入に大連中央郵便局へはよく行きました。日本切手のみならず満洲国切手も買えました。蒐

集した切手は外国切手を含め一万五、六千枚くらいはありましたが、引揚げ時の荷物検査で没収される懸念がありましたので、一階の店の中国人に全部差し上げました。物を集めることには何か執着心が強いらしく、何でも集めたくります。

帰国当初は生活の目処が立たず、働く一方でしたが、結婚、子供の養育も大学卒業を迎えた昭和50年(1975)頃から、漸く生活にゆとりが生まれ、切手・はがき・FDC・ルイスカバー・コイン・紙幣・テレカ・赤福伊勢だより・干支もの等々徹底して収集が始まり、定年退職後も続けられました。

私は大連にいたときの素晴らしい思いを、記憶の限り保存するために、関連する資料を結構幅広く大量に集めました。

当初は前述しましたように、常盤小と大連二中のクラスメートや、先輩を含む旧愛鳩部員の各人に呼び掛けて手持ち資料を提供してもらい、それらを小冊子に取纏めて、カムバック配本し、夫々の皆さんには、とても喜んでもらいました。

大連関連の古絵葉書やパンフレット等は、古本屋やメールオークションで見かけると手当たり次第に買い集めました。多くの人々が大連の色々なものを持ち帰っていて、始めの頃はかなりスムーズに貴重なものまで入手することが出来ました。

斯様に可成の量のものが集まりましたので、テーマ毎にファイルに分類し、自分なりに独り楽しんでおりました。

「20世紀大連会議」より刊行の資料

絵葉書に刻んだ塑像
「心のふるさと大連」



平成18年12月

大連 連鎖商店街
ものがたり



平成20年8月

夢満載の大連航路
あ・ら・か・る・と



平成20年10月

満鐵特急「あじあ」



平成21年4月

日露の遺産
大連 龍西亜町と大広場



平成21年5月

日本民間航空史
(初飛行から終戦まで)



平成21年5月

わが町 騎乗リードした
大連野球会



平成21年12月

大連の電車・バス
ア・ラ・カルト

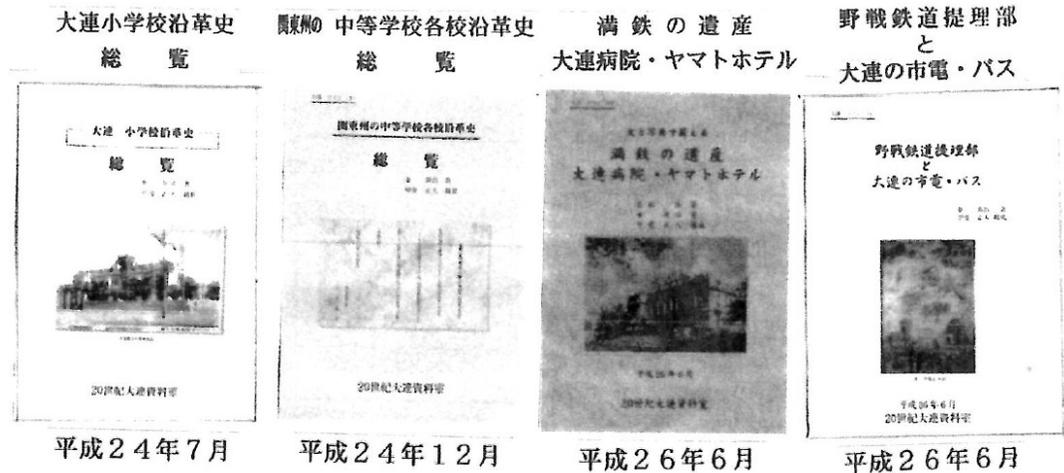


平成23年9月

大連の公園
水師營物語



平成25年9月



平成 14 年（2002）11 月、東京で「切手の友」社主谷信勝先生羊寿を祝う会の席上で、「日満連絡船大連航路」の資料を見せましたら、独り個人で退蔵せず世に出すようにと勧められ、翌 15 年（2003）4 月に「日本の客船とその船内郵便」第三巻特集号として刊行されました。これが出版物の第一号となりました。その年の 10 月末、谷氏が JAPEX（全日本切手展）'03 に出展し、銀賞を受賞しました。

平成 11 年（1999）8 月、大分市で甲斐正人主宰「20 世紀大連会議」の活動を知って、即入会しました。平成 14 年（2002）9 月、北九州市小倉にて、甲斐夫妻と初面談し、大連絵はがき集のファイルを示し、懇談に一刻を過ぎしました。

平成 18 年（2006）11 月、大分市ホテルにて甲斐氏と出版につき最終打ち合せ、12 月、20 世紀大連会議より『絵葉書で刻んだ塑像「心のふるさと大連」』が初刊行されました。私は、ワープロで打ち出し

た原稿を甲斐さんに送り、彼はこれらの資料を整理して小野高速印刷(株)で本に仕上げ、「20 世紀大連会議」より一般に発売されました。私は原稿を提供するだけで、発行などの事務的なことは一切関与しませんでした。以後も『大連連鎖商店街物語』『夢満載の大連航路あ・ら・か・る・と』（これは、切手の友社刊「日本の客船とその船内郵便 特集号 日満連絡船大連航路」が絶版となり、新版再版分）など、次々と刊行され 13 部に及びました。

「20 世紀大連会議」の初期段階には会員が大勢いて、会報と関連資料集もよく売れました。しかし、皆様は高齢なので会員も急速に減少し、大連を懐かしむ人々も徐々に減り、出版物の販売も先細りとなり、「20 世紀大連会議」を維持するのが困難になってきました。大分県府で理事会を開き、甲斐さんなどと相談した上で、状況を考え、止むなく平成 23 年（2011）3 月末をもって解散することに

なりました。しかし、甲斐さんは、なおやり遂げたい使命感を持って、「20世紀大連資料室」と名称を変え、独力で今も闘志を絶やさず頑張っておられます。

なお小野高速印刷(株)では、原稿組版を電子版にして保存されると聞きました。

おわりに

私が生まれ、育ち、遊び、学んだ懐かしの大連、何処からともなく聞こえてくる「……満洲育ちのわたしたち」のメロディーと歌声は、耳の奥底に今も刻み込まれて残っています。

満洲事変・満洲国建国の翌年に常盤小学校に上がり、在校中に支那事変が始まり、大連二中へ進学して間もなく大東亜

戦争が勃発し、休み返上の勤労奉仕が続く、そして南満工専に進んでも学業そこ除けに弓長嶺へ学徒動員に出動し、そして迎えた終戦。振り返ってみれば、何と戦争の落し子そのものですが、私自身はぎりぎりで軍隊に入らずに済みました。幾多艱難の末に何もかも残して漸くの引揚げ、「寒い北風吹いたとておじけるような子供じゃないよ……」の心意気をもって、今に至っております。その辺りの生い立ちの記憶と、「20世紀大連会議」との関わりについて、記録として残すべく、斯く申し述べました次第です。

以上